

12 小国 627
二葉

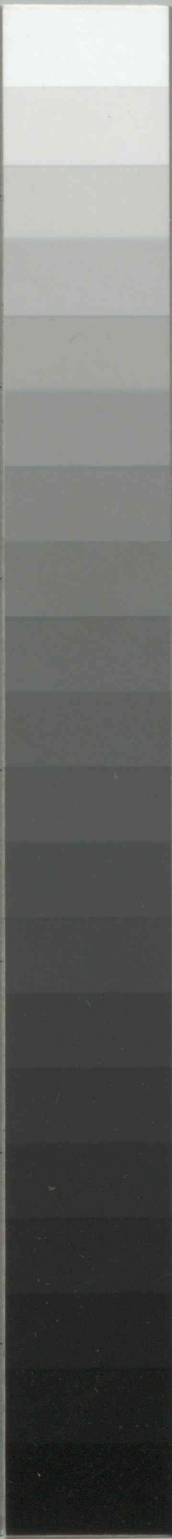
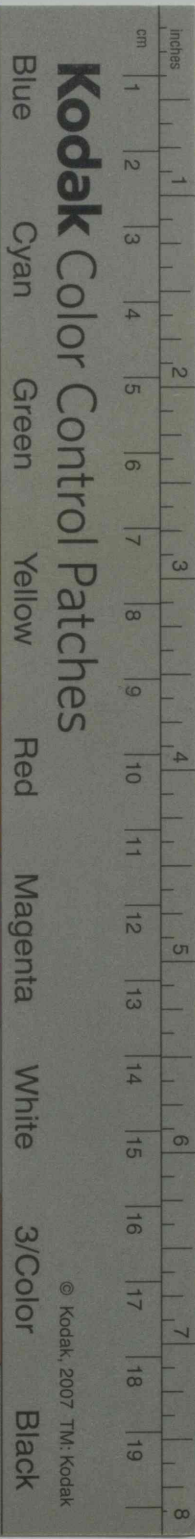
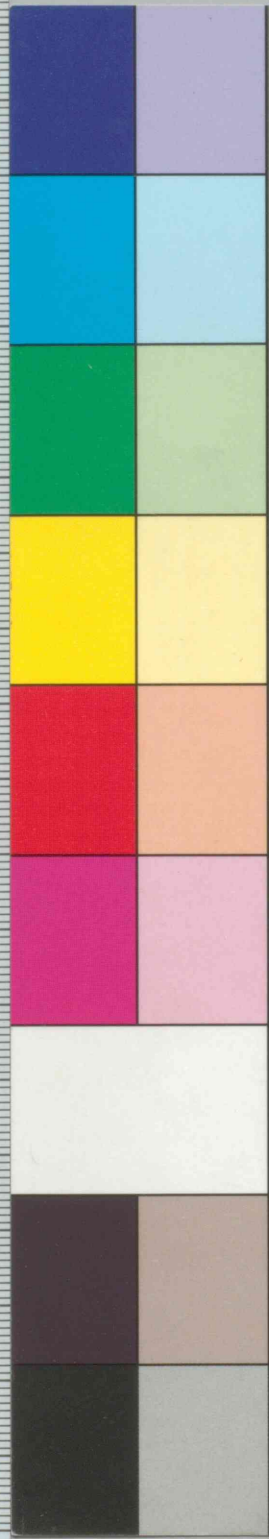
国語の本

文部省検定済教科書
新教育実践研究所編



T1A7
1L0
2

六年上



60345
教科書文庫
6
810
37-195
01304
49914



中央図書館

教科書文庫

6

810

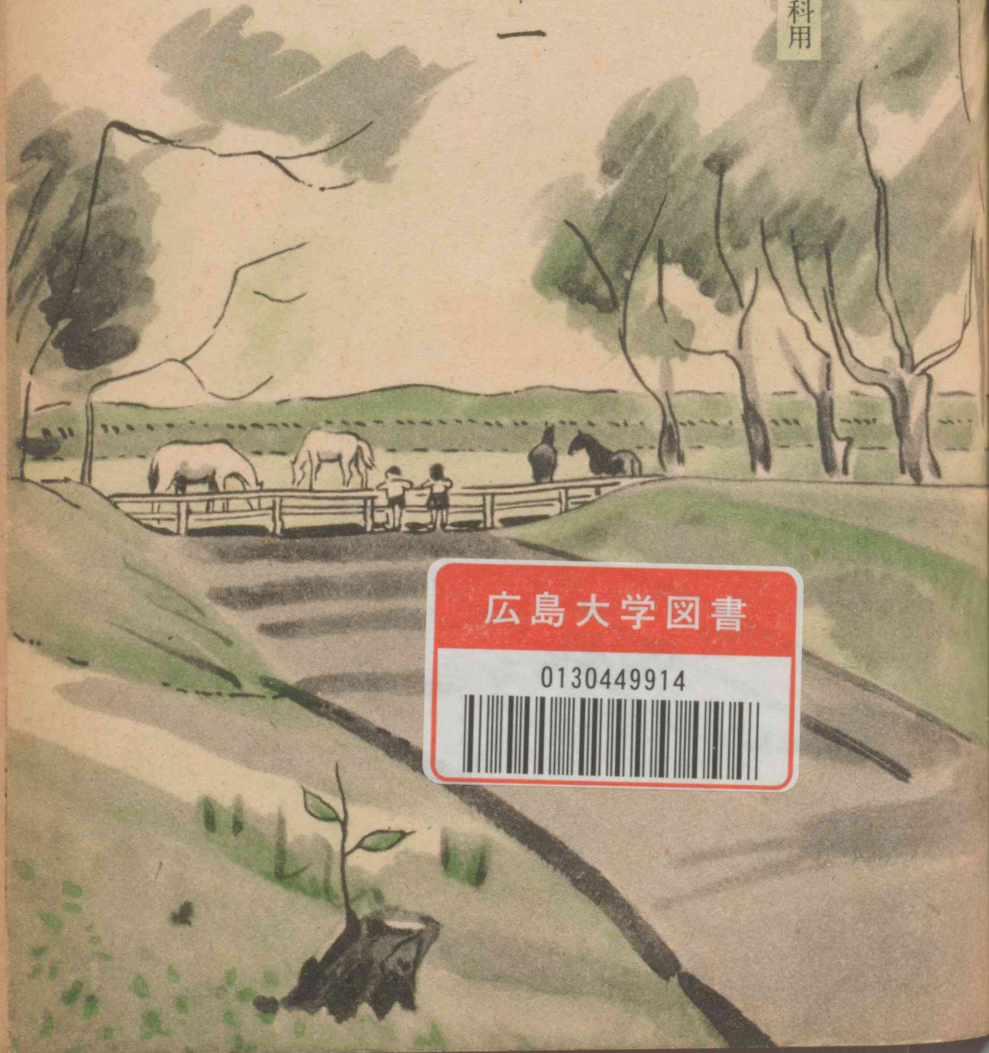
34-1950

0130449914

昭和二十五年八月十二日
文部省検定済小学校国語科用

国語の本 十一

第六学年 上



広島大学図書

0130449914



広島大学図書

0130449914





もくろく

一 花のように

(一) 花..... 4

(二) 運動場..... 6

(三) ここに手がある..... 8

二 新聞の話

(一) 輪転機のうなり..... 10

(二) 新聞の歴史..... 21

三 愛の力

(一) やまどりのおかあさん..... 30

(二) めぐりあい..... 85

四 工夫と発明

(一) 電燈の消えた時..... 52

(二) ものいうおもちゃ..... 61

五 世界の旅

(一) アメリカの町々..... 72

(二) イギリスの工学..... 76

(三) フランスの美術..... 81

(四) スイスの風景..... 86

(五) イタリアの古都..... 90

(六) インドの子供..... 94

六 新しい足あと

(一) 原始林の明星..... 97

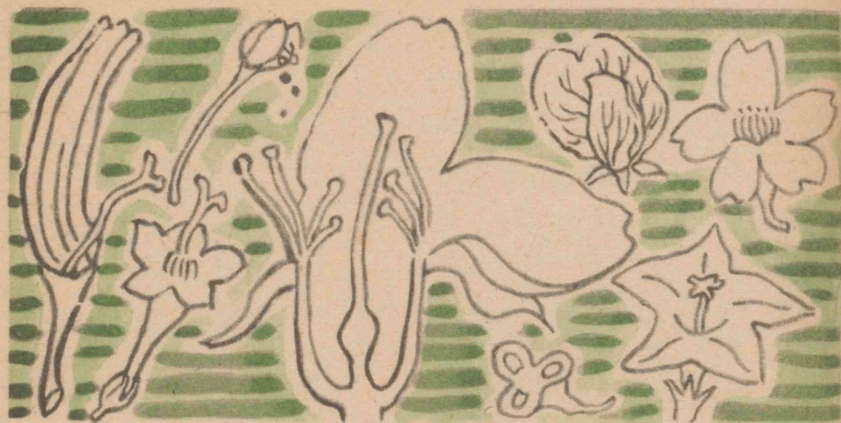
(二) 南極のスコット..... 117

学習の手引..... 145

新しく出たおもなことば..... 153

新しく出た漢字..... 159

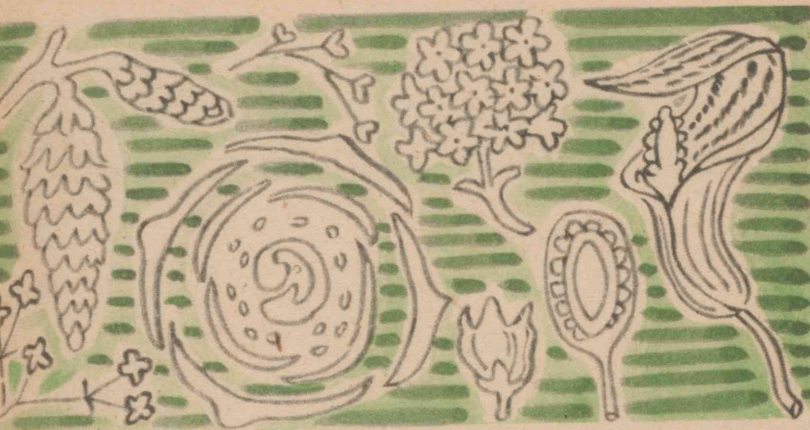




この花のけだかさを、
 生まれたままの美しさを、
 いつまでも心の中にもって、
 花のように私たちは生きよう。

ああ、なんとという美しさ、
 なんとという平和の世界、
 大自然がつくりだした、
 こんな小さいものの中にも、
 満ち満ちている清らかさ。

ゆめのようにけむっている。



一 花のように

(一) 花

いちりんの花をとって、
 その中をごらんなさい。
 じつと、よく見てごらんなさい。

花の中に町がある。

金色にかがやく宮でんがある。

人のいく道がある。牧場がある。

みんないいにおいの中で、

(二) 運動場

さくらの下では六年生のキャッチボール。
ボールの音も正確で、
そこはなにかゆうゆうとしている。

白いネットをはさんだ五六年女生の
バレーボール。

さしのべた手が光のようになびく。

まつの木のまわりを、

りすのようにまわる二年生のおにごっこ。



ぶらんことすべり台の一年生には、
当番の六年生がつきそっている。

三年生、四年生は得意のなわとび。

一つとんで、二つとんで、

三つめでぬけ出す。

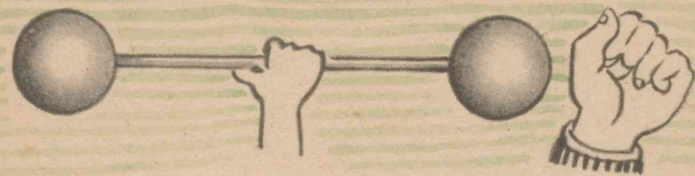
運動場はわきかえっている。

さけびがさけびをよび、動きが動きを追い、
春の光の中に、大きな喜びのさけび声がひろがる。





この手と足さえあればなんでもできる。
 木のぼりはもちろん、ぼう高とびだって、
 泳ぐことだってなんでもない。
 ここに手と足がある。
 この手と足をきたえよう。
 もっともっともむずかしいことだってできるように、
 どんな苦しいことにもたえられるように。



(三) ここに手がある
 ここに手がある。
 この手は石を運ぶこともできれば、
 ペンを持って本を書くこともできる。
 山をほりくずすこともできる。
 ここに足がある。
 この足は走ることもできればとぶこともできる。
 どんな山だろうと坂だろうと、
 また世界のはてだろうと歩いてゆける。
 この手と足、

二 新聞の話

(一) 輪転機のうちなり

一 新聞社のはと

きょうは新聞社の見学です。私たちは電車をおりて、新聞社の前に集まりました。中にはいると、そこには、たくさんのつくえがならんでいて、みんないそがしそくに事務をとっていました。受付には黒山のように人が集まっています、「何々さんをよんでください」という声がとてもぎやかです。しばらく待っていると、先生が案内係の人といっしょに私たちの所へいらつしやいました。はじめエレベーターで七階にあがり、そこから屋



上に出ました。屋上はとても広くて、ひと目で町をながめることができました。

屋上のすみに、はと小屋がありました。赤い目をしたかわいいはとが、めずらしそくに私たちを見ていました。はと係のおじさんが次ぎのようなお話をしてくださいました。

「今、はとは二百ばかりありますが、そのうちの半分ぐらいが伝書ばととして使われています。飛ばす時は、うすい紙に記事を書いて足につけ、写真はアルミ管に入れてせおわせます。」

こういって、おじさんは実際にやって見せてくれました。写真通信管をせおったとは、とても勇ましく見えました。

「はどの運べる重さは六グラムか七グラムぐらいです。飛ぶ速さは一分間に平均して約一キロメートルで、今までの最高記録は、千キロを十三時間で飛んだことです。」

おじさんは、はどがかわいくてたまらないというようすで、小屋の中を見つめました。

2 世論調査

今度は、エレベーターで三階におりました。世論調査の室です。十人あまりのおじさんたちが、上着をぬいで計算したり書きものをしたりしていました。係の人の話によると、ここは、

国民がどういふ考えかたをしているかを調査するのだそうです。たくさんの方の投書を、みんなて手分けして読み、その中からよいものを選んで、新聞にのせるのだそうです。また、このまえの衆議院議員選挙の時に調べた「あなたはどのとうを支持しますか」といふ記録も見せてくださいました。この統計をする時は、三日も四日もつ夜をしたそうです。選挙の結果は、統計とほとんど同じだったそうです。私たちは、この話を聞いて、新聞に出ていゝ一つの統計でも、これをまとめるにはずいぶん苦勞するものだと感じました。何十万といふ大きな数になるので、計算器や計算じやくを使うのだそうです。計算器はタイプライターの機械のようなもので、計算する数字をおもてに出し、ガチャガチャとハンドルをまわすと、答が出るしくみに

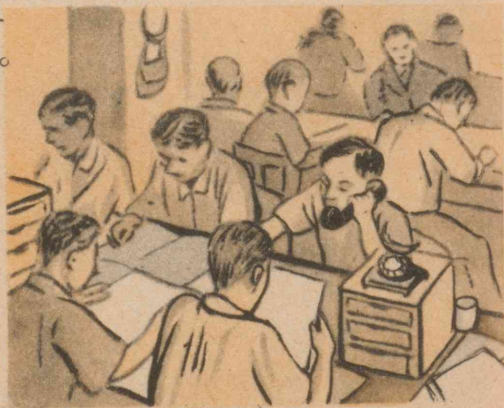
なっています。私たちは、その使いかたを教えていただきまし
た。

3 編集局

いよいよ編集局です。広い大きなへやには、方形の大きなつ
くえがならんでいて、その上には、社会、運動などと書いた木
の三角とうが立っていました。全部で十
三部もあるのだそうです。各部には、そ
れぞれ何十人もの記者さんがいて、役所
に行ったり、事件のあった所に出かけて
行ったりして、記事を送ってくるのだそ
うです。ざら紙のげんこう用紙に書いて



あるニュースも見ました。記事は全部整
理部へまわされ、ここで見出しをつけた
り、誤字をなおしたりして検査し、それ
から電気ベルトで印刷工場に送られます。
私たちが行った時は、ベルトがぶい音
を立てて回転しながら、げんこうを次ぎ
の工場へ送っていました。案内の人は、
「整理部は、おうぎのかなめのような所です。
と、教えてくださいました。」



編集局の別の方には、電話の受話機がずらりとならんでいま
した。全国からくるニュースを、これで聞きとるのだそうです。
電話のほかに、テレタイプという機械があり、モールスふ号の

ト・ツト・ト・ツトという音といっしょに、細長い紙にかたかなの記事が現われてきます。そのそばでは、かんそう機で写真をかわかしていました。届けられた写真が、約十分ぐらいで現像されると聞いて、その仕事の早いのにびっくりしました。

電送写真室も見学しました。機械に写真を取りつけて、実際に動かしながら説明してくださいました。たて二十四センチ、よこ二十八センチの写真は、約七分で送ることができるそうです。電送写真は、よく見ると、はりてついたような点でできていました。これは、写真の白い所と黒い所を、強弱の電流にかえて送り、受電そり置の方では、その電流を強弱の光にかえて、小さなあなから、印画紙に感光させるためだそうです。

4 印刷局

編集局を出て、今度は印刷工場へ行きました。そこは、たいへんないそがしきで、みんな油だらけになって働いていました。電気ベルトで編集局から送られてきたげんこうが、活字を拾う

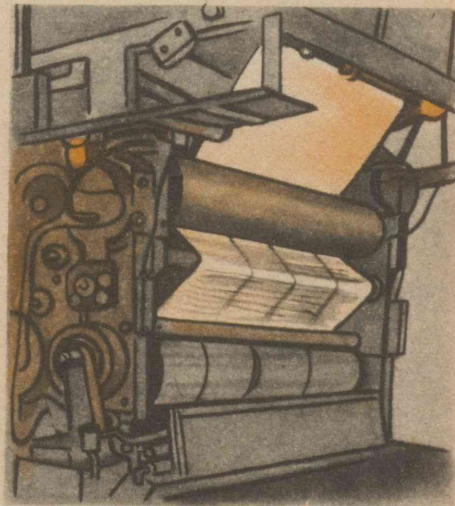
人の手にわたると、その人たちは、大きな見出しの活字と、ふつうの活字とを、じょうずに拾います。それから、活字を糸でくりつけます。それを小組というのだそうです。小組のまま小さな紙に印刷したのがゲラ刷で、ゲラ刷は次ぎの校えつ部へ送られ、校えつ



がすむと、大組の方にまわされるのだそうです。大組の人は、集まってくる小組を、はこのようなものにきつちりとつめて新聞の型をつくり、次ぎの紙型をこしらえる人にわたします。紙型にする厚い紙を大組の上のせて、圧さく機の中に、百五十度の温度で三分半ほど入れると、紙型がでけるそうです。紙型は、活字に厚紙のあとがくいこんでいて、厚い新聞紙のようなものでした。その紙型に、なまりを流してえん板をつくり、水でぬらしながらまるく曲げ、それを輪転機にかけるのだそうです。新聞に使った活字は、一日使っただけで全部とかしてしまい、また新しい活字につくりなおすとのことでした。活字をつくる所では、たくさんの機械が動いていて、活字が次ぎ次ぎに出ていました。ケースにはいった活字は、あすの新聞に使われるのだそうです。

5 輪転機のうちなり

私たちが行った時は、まだえん板をとりつけているところで、輪転機は動いていませんでした。えん板は、竹のつつをたてにわたったような形で、



これを輪転機にはめこみます。しばらくすると、ベルがなりました。すると、O・Kの信号が出ました。機械は、待っていましたといわんばかりに、もうれつな音をたてて、いっせいに動き出しました。たいへんな勢いなので、すぐわきの人に話すのにも、耳のそばに口をよせて、大声

で言わなければなりません。

印刷する紙は、新聞紙二ページ判を、横に四まいならべた大きさのもので、それがまいてありました。しんぼうが一回転すると、一どに八まいも印刷ができます。印刷された新聞は機械の力で一まい一まいにたち切られ、ふたつ折りにされて、電気ベルトで、次々と発送部に送られています。

6 発送部



発送部へまわされた新聞は、係の人がす早く大きな紙に包んで荷づくりし、はばの広い電気ベルトで次ぎから次ぎへと送っていました。待っている貨物自動車

は、それを積みこんで各駅に輸送するのだそうです。毎日、配達される新聞は、こんなたくさんの人手や機械の力をかりて発行されるのです。私たちは、ほんとうにおどろきました。それと同時に、私たちは、新聞社の方々に感謝する気持ちで一ぱいになりました。

(二) 新聞の歴史

ひととおり見学が終わったので、ひかえ室で休んでいると、木村君が、

「むかしは、どんな新聞があったのですか。」

と、先生にたずねました。先生はにこにこしながら、「それは、よい問題を提供してくれました。新聞社の方もおい

そがしいでしようが、ちようどよい機会ですから、新聞の歴史についてお話していただくようにお願いしてみましよう。」とおっしゃいました。間もなく、先生といっしょに、まえとちがった方がひかえ室にはいつていらっしやいました。この新聞社で編集の仕事をしている大木さんという方だそうです。私たちは、この方から新聞の歴史についてお話を聞くことになりました。

「みなさん、きょうはよくおいでくださいました。それでは、これから新聞の歴史について少しお話いたしましたましよう。みなさんは新聞がどんなふうに発生したかご存じですか。まず、大むかしの人々の生活を想像してみましよう。未開時代の人々が、あちらの山、こちらの野に集団生活をしているとしましよう。

いわば部落生活ですね。そうした場合、部落民どうしてはおたがいに助け合っている、他の部落の人たちとは、しじゅう争いながら生活していたにちがいありません。そんな時には、どなりの部落にどんなことが起っているか、敵がどんな武器を持っているかということが知りたくなります。それが興味のある話であるか否かにかかわらず、自分たちの生存のために大切なことだからです。したがって、どなりの部落のことについて何か新しいことを知れば、もうだまっではいられません。だれかれなしに、ふれまわるにちがいありません。何か新しいことを知りたい、知ったことは人に話したい、こいう性質はだれでも持っています。これは人間の本能だからです。

別にむかしのことでなくても、みなさんが何か耳よりなこと

を聞くと、もうだまっていられないことは、だれでも経験することです。つまり、新聞の発生は、こうした人間の本能にもとづくものなのです。ですから、人間が文字という便利なものを考え出した時、すでに新聞は発生したのだと考えてもよいわけです。

さて、新聞の発生は人間の本能によるのだということ申しましたが、それでは、次に、現代のような新聞はいつごろからできたのでしょうか。それは、十五世紀の中ごろのことです。ドイツのグーテンベルグという人が印刷機を発明しました。これが新聞発行の原動力となったことはいまでもありません。十六世紀の中ごろには、イギリス、フランス、イタリア、ドイツなどで新しい印刷機を使って、盛んに新聞が発行されるようになります。

なりました。最初は週刊の形で、大体発行都市を中心に、政治上の動きなどをありのままに書きつらねました。新聞に対する人々の関心が高まり、言論機関として勢力を得るようになるにすぎない、その形式や記事にも改良が加えられました。こうして、十九世紀ごろには、政府に対する民間の機関としてどんどん発展し組織化されて、現代ではすばらしい発達を遂げています。

ところで、これは外国の新聞の発達史であります。日本の新聞はいつごろから発行されるようになったのでしょうか。日本の新聞のおこりは、千八百六十二年（文久二年）に出た官板バタバヤ新聞だといわれています。しかし、前にもお話したように、多くの人間が集まって社会生活をしており、交通関係のあると

ころには、必ずニュースがあるものですから、現代のように整った形ではないにしろ、なんらかの形で早くから出ていたものと思われまゝ。

めずらしいのは、徳川時代に出た読売かわら版という新聞です。これは、天災、火災など時事的な事件を、絵入りでそまつな木版の一まい刷りにし、大道で読み売りしたものです。現在残っているもので一ばん古いものには、元和八年五月の大きか夏のじんの合戦をえがいた「大きかあべ野合戦」というのがあります。



さて文久年間には、アメリカ、オランダ、中国などの新聞を

輸入し、それを日本向きに訳して印刷発行した海外通信というのがありました。たとえば、バタビヤ新聞・海外新聞・海外新聞別集、あるいは、中外新報・六合ろくごそう談・ホンコン新聞などのようにたくさん種類がありました。これを総称して文久新聞ともいつているのですが、明治の前に、もうこのような新聞がさかんに発行されていたのです。

しかし、これもやがて発行中止になり、こんどは洋書調所の洋学者が、会訳社というものをつくり、そのころ横浜で発行していた英字新聞を訳して、日本新聞・日本貿易新聞・日本交易新聞などといって希望者に配布していたことが記録に残っています。その後も、各種の新聞が出ていましたが、やがて明治三年十二月に、「横浜毎日新聞」という日本ではじめての日刊新聞

が発行されました。日本の新聞のはじまりは、どちらかという
と、外国新聞のえいきょうが強いです。これは海外事情を
早く知りたいという、当時の社会の要求によったものといえま
しょう。

明治十四年ごろ、国会の開設をめぐって政治運動がさかんに
なつて、新聞も政治上の議論を主とするようになり、いわゆる
政どうの機関紙時代があらわれました。こうしたけい向も明治
二十二年の憲法発布と共におとろえはじめ、評論新聞、ご楽新
聞から、だんだん報道中心の新聞として著しく発達するようにな
りました。ことに国運が開け、ひろく世界各国と交しよるを
持つようになり、需要も多くなるにつれ、新聞の種類はもちろ
ん記事の内容もしだいに変化してきました。発行の中心はなん

といつても東京と大きかたで、発行される全国紙は、何百万とい
う数にのぼりました。また、地方紙にも有力なものがたくさん
あらわれ、それぞれ特色のある記事をのせるようになりました。
現在では新憲法の示すところによつて言論の自由が保しよさ
れ、真実なニュースが正確びん速に報道されています。空气中
に酸素が無くってはならないように、今では、社会に新聞は欠く
ことのできないものとなりました。どうか、みなさんも、新聞
の正しい意義を理解して、新しい文化国家を建設するために協
力していただきたいと思ひます。」

大木さんの熱心なお話は終わりました。私たちは、思わずはく
手をしました。大木さんにあつくお礼を述べ、新聞社を辞して
帰りました。

三 愛の力

(一) やまどりのおかあさん

私が歩いているのは、海抜つ八百メートルほどの高原だった。そんな高さの所では、六月の末といっても、風はまだ冷たかったが、見るかぎり目のさめるようなわか葉で、道ばたには、トウギボウシという名の、うすむらさきの花がならんでさいていた。まるで花のろうかを歩いているようだった。私はリュックサックのほかに、テントもかついでいたので、せなかが重かったけれど、気も軽々と、その花の道を歩いた。

道はやがて林の中へとはいって行った。道ばたに幹の太いも

みの木やせいの高いすぎの木がしげっていて、その下は深い日かげをつくっていた。そのかげの中へ、日の光がこぼれているので、風がふいて木の葉が動いたびに、光がちらちらとひらめくのが、まるでげん燈のようだった。そんなげん燈のような光の中で、何かがちよつと動いたようだったが、私は、日の光が動いたのだと思って、通り過ぎた。しかし、一キロも歩いてから、「さっきのは、どうも日の光ではなさそうだ。何か鳥だったかもしれない」という考えが、だんだん強くなった。ともかくもどってみようよと、私は思った。そうして、もとの所へひき返した。

はたして、それは鳥のすだった。やまどりが、地べたにこしらえたすの中で、かわいいひなをだいてあたためていたのだっ

た。

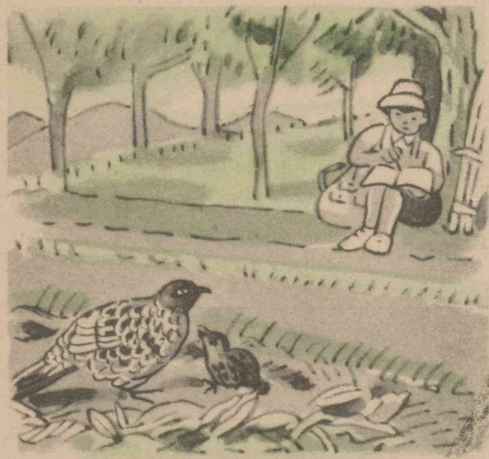
やまどりのすは、地べたを少しくぼめて、その上に、落葉や
かれ草をくわえてきてしきつめただけのものだ。が、そこでひ
なたちをだいてあたためている親鳥のはねの色が、茶色のふち
なので、あたりの物とまぎれてしまう。めすの方は、おすのよ
うな長いおをもっていないので、なおわかりにくい。ちようと
かれ草の中へ、フランスパンをころがしたようなものなのだ。

おまけに、やまどりは人がそばを通っても、ほかの小鳥たち
のように、あわててすから飛び立つようなことはしない。ただ
じっとしているだけだから、人は気がつかずに、そばを通り過
ぎてしまう。たぶん、こうしてじっと動かずにいると気づかれ
ずにすむので、ひなのためにかえって安全だということをよく
知っていて、そうしているのだろう。

それでもこのやまどりは、私がそこを通った時に、おどろい
てちよつと首を曲げて、私の方を見たものらしい。その首の動
きが私の目にとまったわけであった。一キロも歩いてから私が

気がついたことは、やっぱりそのとお
りだったのだ。

私はやまどりのすぐそばにしゃがみ
こんだ。手をのばせば届きそうな所で
写生を始めた。やまどりは、こわごわ
私をじっと見ていたが、目には落ちつ
かない不安の色があった。つばさの先
がかすかにぶるぶるふるえているのは、



もしも私が手をのばしたりしたら、飛び立とうという用意らしい。それでもやまどりは、ひなが大切だから、いよいよ最後のき険が身におよぶまでは、飛び立たずにじっと私のようすを見ているのだ。自分はどうなっても、ひなをかばおうとするこのやまどりのおかあさんの真けんさは、私の心を打った。

私は、木こりが、山の木を切っているうちに、こういうやまどりのすを見つけては、自分の着ているはんでんで親鳥をかぶせてつかまえてしまうことを思い出した。なるほど、このやまどりのようすでは、はんでんをかぶせてつかまえることもできるだらうと思った。

が、私は木こりの早わざなどよりも、こんなき険に臨んでもなおひなを守ろうとする親鳥の愛情の方に、どれだけ感心する

かshれない。だから私は、写生を半分でやめてしまった。いつまでも、このおかあさんのやまどりを心配させているのがかわいそうだったからだ。そうして私は、急いでそこを立ち去った。

(二) めぐりあい

フランスの、あるいなかの小さい村に、車だいくの夫婦が住んでいました。

ふたりとも気だてのいい人で、その上、非常な働きものでしたから、わずかながらたくわえもできて、気楽にくらしておりました。

ただふたりには子どもが無いので、それがなげきの種でありましたが、そのうちに、その子どももやっどさずかるようにな

りました。男の子でしたのでジャンという名をつけました。長い間ほしくてたまらなかつた子どもが生まれたのですから、ふたりはとてもジャンをかわいがって、ちよつとのまもジャンの顔を見ないではいられませんでした。

ジャンが五つになったとき、サーカスの一ざが流れてきて、村役場の前の広場に小屋をかけました。ジャンはそれを見るとこっそりと家をぬけだして、小屋のなかへ遊びにいきました。ジャンのすがたが見えないのにびっくりした父親は、ながい間あちらこちらをさがしまわりましたが、やつとジャンが、いろいろの芸をしこまれためやぎや、軽わざをする犬にとりかこまれて、年よりの道化師のひぎの上になだかれて、高い声をあげてわらっているのを見つけました。

その日はすぐにジャンを連れて帰りましたが、それから三日ばかりたつて夕飯の時間に、食たくにつこうとした車だいくの夫婦は、いつのまにかジャンが家にはいないことに気がつきました。

庭の中をさがしたけれど見つかりません。父親は道ばたに立って、声をかぎりに、「ジャン」をよびました。あたりはいつのまにか夜になっていました。野末には夕やみが立ちこめて、森も山もその暗いおそろしいやみの中にぐんぐん引きこまれていくように見えました。家のすぐそばにある三本の大きな木も木はないていようの思われました。いくどよんでも、どんな声も答えてはくれません。なにかしらけだものうめき声に似たものが、かすかに聞こえるばかりです。父親は長い間、じつと

耳をすましました。あるときは右の方に、あるときは左の方に絶えずなにかが聞こえるように思われるのです。半分気持ちがいのようになった父親は、「ジャン、ジャン。」とよび続けながら夜の明けるとまでかけまわりました。母親はかど口の石の上ですわったまま、朝がくるまですすりないていました。ジャンのすがたは二度とは見つかりませんでした。

車だいくの夫婦はどんなにしてもあきらめることができず、悲しさのあまり、にわかにながよってきました。とうとうふたりは、長い間住みなれた家を売りはらって、自分たちの手でジャンをさがしだすために旅に出ました。

ふたりは、山のふもとのひつじかいかや通りがかりの旅あきんどや、また村へはいればひやくしように、町へいけば役所において、いろいろとたずねました。しかしジャンが見えなくなつたのはずいぶん前のことだから、だれひとりとして知っているものはありませんでした。当人のジャンでさえ、今では自分の名も、生まれた村の名も覚えていないにちがいありません。もう何ひとつ希望はありませんでした。ふたりはなみだを流しておりました。

そのうちに、わずかなたくわえもなくなつてしまいました。そこでふたりは旅の道すがら、ひやくしよの仕事を手伝つてお金をもらったり、宿屋を見つけると、そこで他人の残りものをもらったり、なやのすみでねかしてもらつたりするためにいちばんつらい仕事を引き受けました。しかしはげしい労働のためにふたりはひどく弱つてきましたので、そうになると、もう

だれもかれらを使ってはくれなくなり
ました。やむをえずふたりは道ばたに
立ってこじきをしなければならなくな
り、旅人のすがたを見ると、悲しそ
うな顔をして、あわれっぽいことばを
ちかけ、昼、野原の木の下で食事を
しているひやくしようの一家に出あ
うと、そばへ近づいてパンのひと
きれをねだ

るのでした。そうしてふたりは小川
のふちにすわって、口をきく元氣も
なしに、だまってそれを食べるので
した。

ある日、ふたりの悲しい身の上
ばなしを聞かされた宿屋の主人は、
ふたりに向かって「わたしはむす
めをなくした人を知っ



ているが、その人はバリでそのむす
めさんにめぐりあったそう
だよ。」と教えてくれました。そこ
でふたりはすぐにバリをさして歩
きはじめました。ふたりがこの大
きな都に足をふみ入れたとき、そ
の広くて大きなこと、町を歩いて
いる人の数の多いことにすっかりお
どろかされました。それでもふた
りは、こんな人々の中にこそ、きつ
と自分の子がいるにちがいないの
だと思えました。しかしそれをさが
し出すのはどうすればいいのでし
ょう。それに、たとえむすこに出
あっても顔を覚えていないか
が心配です。ジャンを見失ってか
らちようど十五年めだったか
らであります。

ふたりはあらゆる広場を、あらゆる
通りをたずねまわりました。人だ
かりのする場所ではかならず足を
止めました。神さま

のごじ悲で、ぐうぜんめぐりあうことがありますが、ようにと心の中
で念じながら、こんなふうには、老人夫婦があてもなくほつつき
歩いているすがたは、あまりに悲しそうで、あわれまうべきに
め、ふたりが手を出さない前に人がほどこしものをくれるほど
どでありました。日曜日がくると、ふたりはいつも教会に出か
け、入口のところ立って、出入りする信者たちの顔をながめ
て一日をすごしました。ときどき見覚えのあるような気のする
顔に出あうこともありましたが、たずねてみると、いつもふた
りの思いちがいでした。

ふたりがいちばんよく通ったある教会の入口に、信者たちに
聖水をさし出してお金をもらうひとりの老人がいました。ふた
りはその人と友だちになりました。その老人も、話を聞くとな

いそう気の毒な身の上の人で、そのためにかれらはいつそうな
かのよい友だちになりました。

そのうちにかれらは、パリの町はずれにある、大きなアパー
トのてっぺんの、みすばらしいへやを借りて、そこで三人いつ
しよにくらすようになりました。そして車だいくは、この新し
い友だちが病気のときは、かわりに教会に出かけて聖水のほう
しをしました。冬がきました。例年になくきびしい寒さでした。
そのためこのあわれな老人は死んでしまいました。

そこで教会の牧師さんは、へいぜいからその身の上ばなしを
きいてかわいそうに思っていた車だいくを、そのあとがまにや
とってくれました。

それからかれは、毎朝一日の休みもなしに教会へ出勤して、

同じ場所の、同じいすの上になすわって聖水のほうしをしました。かれは教会にやってくる人はどんな人でも注意してながめました。とりわけかれは日曜日を小学生のように待ちこがれました。なぜなら、教会は、日曜日には一日中おまいりする信者たちでにぎわうからであります。

しかし教会のなかはいつともじめじめしているので健康に悪く、かれはしだいに弱ってきて、ひどく年がよってきました。その上ジャンにめぐりあえる希望は日一日とすくなくなつたのです。今ではかれは、教会におまいりにやってくる人々とはすっかり顔なじみになりました。その人たちのやってくる時間や、いろいろなくせまで覚えこみました。しき石をふむ足音でだれがきたのか聞きわけることができるほどになりました。

見なれない人がひとりでも教会にはいつてくると、かれにとつては大事件であるほど、毎日の生活が単調なせまいものになつていました。

ある日のことでした。今まで見たことのないふたりの女のひとがやってきました。ひどりは年よりで、ひどりはわかいむすめさんでした。たぶん、母親とむすめにちがいありません。少しおくれてまたひとりのわかい男がやってきました。おまいりがすみすすと、さっきのふたりと、この青年とは教会の入口でしだしそうにあいさつをかわしました。それから青年は車だいくから聖水を受けとつて、ふたりの女の人にさし出し、それから老婦人のうでをかかえて出ていきました。

——きつとわかいむすめさんのいいなずけにちがいない、と車

だいくは思いました。

それからかれは夕方まで、きよりのわかかい男によく似た人にむかしあったことのある記おくを、いろいろと思ひ出そうとしました。しかし雲がかかったようで、どうしてもはつきりと思ひ出せません。この同じわかかものはそれからたびたびふたりの婦人と一しょにやってきました。そのたびごとに車だいくはなんどかしてはつきりと思ひ出そうとするのですが、むかしどこかで見ることがあるような気がするだけで、どうしてもつきとめることができないのです。そこでかれは自分のおとろえた記おくを助けるために、おかみさんを連れてくることにしました。ある夕ぐれ、日がしずむころ、例の見しらぬ人たちは、三人そろって教会へやってきました。かれらが前を通ったとき、

「どうだい、おまえに見覚えはないかい。」

と、車だいくはいいました。

おかみさんは、同じように思ひ出そうとあせっていましたが、不意にかの女はささやくような低い声でいいました。

「そうだわ……そうだわ。……でもあのわかかい人はかみの毛はもつと黒いし、せも高いし、それにしん士さまのようなりっぱな身なりをしている。けれど、どうさん、あの人はあるたのわかかい時分の顔とそっくりですよ。」

車だいくの老人はそれを聞いてとびあがりました。全くそのとおりでした。そのわかかいものは自分に似ていました。死んだ自分の兄にも似ていました。自分の覚えている、わかかいころの父にも似ていました。老人の夫婦はおたがいに口がきけないほ

ど感動していました。三人の人たちはおまいりをすませてちやうど門を出ようとしていました。わかものは聖水をかける道具に指をふれました。そのとき老人はぶるぶると手がふるえるために、聖水を雨のように地面にふりまきながら、低い声で、「ジャン」とよびました。わかものは足をどめて老人の顔をみつめました。老人はいっそう低い声でもう一度「ジャン」とよびました。

ふたりの婦人はびっくりして、老人の方をふりむきました。そこでかれはすすりなきながら三度めに「ジャン」とよびました。わかものは老人の顔に息のかかるほどからだをかがめました。おさない時分の記おくにはっとして答えました。

「パパのピエールに、ママのジャンヌ？」

わかものは自分のおとうさんの名まえも、何もかもすっかりわすれていました。

しかし小さい時分にあんなになんどもくりかえしていった、「パパのピエール、ママのジャンヌ」というふたつのことばだけは、いつも思い出すことができたのです。かれは老人のひざにとびついて、その上に顔をうずめました。そしてなき

続けました。思いがけない大きな喜びにのどをつまらせている両親をかわるがわるだきしめながら。

ふたりの婦人も、またないていました。大きな幸福がやってきたことをさどって。



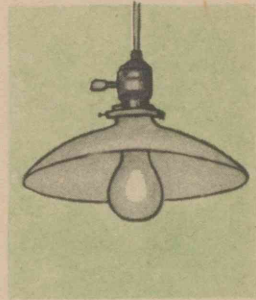
それからみんなそろってわかもの家にいきました。ジャンは両親にその身の上ばなしをしました。

サーカスの一行がジャンをかどわかしたのでした。三年の間ジャンはたくさんの国々を流れ歩きました。それから一ざは分散しました。その時、あるりっぱな家に住んでいる老貴婦人がお金を出してジャンを手もとに引きとってくれました。かわいらしい子どもだったからです。その上、かしこい子どもでしたから、学校へやってもらいました。だんだん上の学校へ進みました。この老貴婦人には子どもがありませんでしたから、ジャンはたくさんの財産をゆずられました。ジャンの方でもまた両親をさがしていたのです。しかし、「パパのピエール、ママのジャンヌ」というふたつの名まえしか思い出せないジャンには、

両親をさがし出す手だては全くみつからなかったのです。ジャンはおよめさんをもらうところでした。あのわかい美しいおすめさんはやっぱりジャンのいなすけだったのです。

こんどは老人夫婦が、いままでのつらい悲しいものがたりをしました。それがすむとかれらはもう一ぺんだきあいました。

その夜は、夜のふけるまで、みんなで話し続けました。いままでかれらの手からにげまわっていた幸福が、かれらのねているまにまたもやかれらをすててにげ出しはしまいかと心配して、かれらはねるのがこわいのでした。しかしこんどはもうだいじょうぶです。不幸をすっかり使いはたしていたので、かれらは死ぬまで、幸福にくらすことができました。



四 工夫と発明

(一) 電燈の消えたとき

(1)

仁一君は、今夜も復習をしていました。台所で、ことごとく音がします。おかあさんは、いつも、仁一君が作った電気パン焼き器で、パンを焼いてくださるのでした。

仁一君はもう終りに近づいていた勉強に一だんと力をいれて、どうどうすましてしまいました。そして立ちあがったとたん、電燈がパツと消えました。「おや」というのと同時に、台所からも、「あら、困ったわね。停電かしら」。

というおかあさんの声です。仁一君はがらがらと雨戸をあけて、外を見ますと、前通りの家は何事もないようです。二丁目の通りも何事もないようです。

「おかあさん、停電じゃありませんよ。うちだけですよ」。

「まあ、そう。じゃ、ヒューズが切れたのね。きつとパン焼きで無理がいったのよ」。

仁一君の研究では、電気パン焼き器を使っていると、スイッチを入れてからしばらくすると、電流が最大になるといふことがわかっていました。おかあさんはそれをござんじでした。

「ぼくがなおしましよ」。

理科の大すきな仁一君は、じっとしていられません。すぐにねじまわしとヒューズを持ってきました。そして台所の柱にあ

る安全器を開いてみました。思ったとおり、安全器の中のヒューズが切れて、せと物で作ったふたの内側は黒くすすけています。うす暗いろうそくの光をたよりに、やっとねじをゆるめて、新しいヒューズをつけかえ、もう一度中を確かめました。

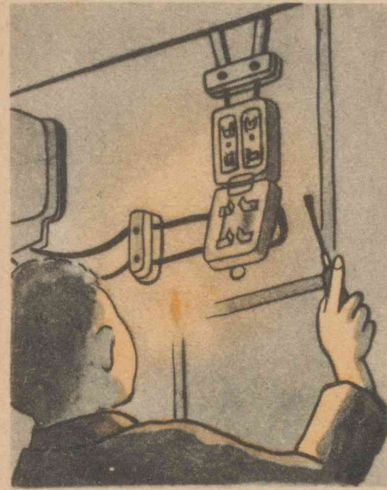
「これでよし——。それからおかあさん、パン焼き器は、はずしてありますね。」

注意深くふたをもとにもどして、ぐっとおすと、パツと電燈がついて、まぶしいように明かるくなりました。

「えらいわね。」

「感心、感心。」

おかあさんやねえさんがほめました。



た。

「なんでもないよ、こんな事ぐらい。」

仁一君は、ちよつとはずかしそうでした。

(2)

それから、なん日かたったある日、仁一君が勉強していると、姉の絹子さんがよびにきました。

「仁一さん、きてちようだい、わたしのへやの電気スタンドがどうしてもつかないのよ。電球は何ともないの……。ほかへつけるどつくのよ。」

「じゃあ、見てあげよう。」

仁一君が絹子さんのへやへ行ってみると、まっ暗です。スタンドを手に取って、電球をすかして見ましたが、なるほど心線

は切れていません。

「フィラメントは切れていないし、ぼくの所はついてるんだから、停電じゃないし、安全器でもないし——」。

スイッチか、コードにちがいないと見当をつけました。それで、まず、スタンドのスイッチをパチパチやってみましたが、何ともありません。そこで今度は、てんじょうから下っているコードと、スタンドのコードをつなぐソケットプラグを調べました。

「プラグ」が少しゆるい上に、さびていたのです。この接しよくが悪かったので、仁一君は、プラグの二本の金属へんをやすり紙でみがいて、間をちよつとひろげました。そして自信たっぷりで、元通りにさし込んでスイッチを入れました。

「つかないわよ」。

ねえさんが答えます。

「おや、変だぞ」。

あわてた仁一君は、そのスイッチを二三度パチパチやりましたが、やはりつきません。そのうちに仁一君は別の発見をしました。コードをソケットにとりつけてある所が、何だかぐらぐらしているような気がするのです。ここだと思ったので、ソケットの上がわをねじではずしてみますと、果してコードの一方がとれていました。

「ここですよ、ねえさん」。

故しうを見つけた仁一君は、それを直そうとしましたが、ここには電気がきているはずです。うっかりさわったら、ピリ

ピリとします。死ぬほどの事もないでしょうが、気持のよいものではありません。また、このコードのはしが一方のコードにさわったりすると、それこそすごいスパークを出して大変です。ここを直すには、どうしても電気をとめなくてはなりません。それには、安全器のふたを開けばよいのです。

「おとうさん、ちよつと暗くなりますよ。」

といつてろうそくをつけた仁一君は、台所の安全器のふたのひもをぐつと引きました。電気の大元を消したので、家中の電燈が一時に消えてしまいました。その中で、うす暗いろうそくの光をたよりに、コードの先を切つてつけかえました。

「よし——」安全器のふたをもとのようににもどしました。家中がパツト明かるくなりました。ところが絹子さんのスタンドはと見ると、まだ消えたままです。

「おかしいな。電球、スイッチ、コード、プラグ、みんな故障しようがない。安全器はむろん大じょうぶ。わるいところはなはずだが。」

念のためもう一度、全体を調べてみましたが、わかりません。仁一君は、てんじょうからたれてゐるコードをにらんで、考えこんでしまいました。

「すると、あれかな。」

てんじょうにコードをとりつけたせどもの台がついています。残るところはそこだけです。仁一君は、つくえの上にこしかけを持ってきて、その上にあがりました。

その台のふたをひねりますとわけなく動きます。注意深くま

わしていますと、ようやくはずれて中が現われました。そこにも細いヒューズが仕掛けてあります。それが切れていたのです。

「ああわかった。ねえさん。スタンドを動かす時、さっき、コードのところパチッと火花が出たでしょう。」

「ええ、そういえば、音がしたわ。」

「その時、ここが切れたのです。」

やっと原因をつきとめた仁一君は、うれしくてたまりません。また安全器をはずして電流をとめ、ここのヒューズを取りかえました。

「今度こそー。」と安全器をもどす仁一君は、それでもちよつと心配でした。

いつものようにふたをぐつと元へもどすと、パツとねえさんのスタンドにあかりがつきました。

(二) ものいうおもちゃ

アメリカ合衆国ボストン市のろうあ学校に、ひとりのわかい先生がいました。小さい時から、どこか変わったところがありました。おもちゃが大すきで、それをあたえておけば、一日中ひとり遊んでいます。だんだん成長すると、人の顔さえ見れば、「なぜ」「どうして」。どうるさくたずねるようになり、これにかまったおとなは、すっかりかぶとをぬいでしまうのでした。そのうちに、も型機械に興味を持ちはじめて、くだいたり組み立てたりすることが、三度の食事よりもすきになりました。

千八百四十七年、スコットランドに生まれ、少年時代をそこで過ごしました。この先生が、まだ十五才の少年であったころふと、人間の声というもののふしぎさに気づきました。

「人間は、くちびるや舌を動かして、いろいろ変わった音声を出す。考えてみると、じつにふしぎだ。」

少年の「なぜ」「どうして」は、ついに研究の糸口をしつかりとつかんだのです。それからむちゆうになって、みょうなものを作り始めました。まる一年かかって、やっとできあがりました。それは、人間の頭のようなもので、ふいごで風をふきこむと、ゴムのくちびるが動いて、生きた人間のように声を出すしかけになっていました。

二十才を過ぎたころ、両親と共に本国をはなれて、はるばる

カナダへ移住しました。この地で、耳の聞こえない人、口のきけない人の教育を始めましたが、たいへんに成績がよくて、間もなくボストン市からよばれ、そこでろうあ学校の先生をするようになったのです。

先生が十五才の少年だったころの、あのみような実験は、その後も決してわすれることができませんでした。ろうあ学校で気の毒な子供たちを教えるようになる、いよいよ熱心に、声の原理や、舌、くちびる、耳などの生理を勉強しました。

しかし、何といても、耳や口の不自由な子供たちのことですから、教える方も教えられる方も、なみたいていの苦心ではありません。先生は、なんとかしてこのかわいそうな子供たちのために、便利な機械を作りたいと思いました。そうして、話

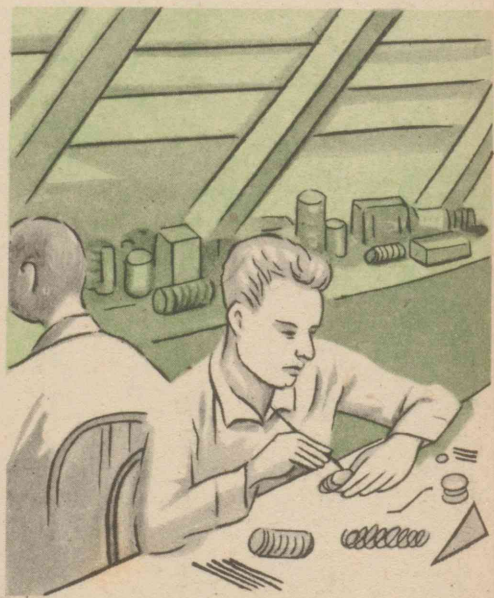
をする時におこる空気のしん動を、目で見る機械の工夫をした
り、または、そのころ評判になっていた、電信機械を研究した
りしました。

そのうちに、ふと別の考えが、先生の頭にうかびました。

「電信は、電気的作用によって、点やぼうのふ号を用いて通信
するものだが、このふ号の代わりに、人間の声を用いることは
できないものか。」

これに思い至ると、先生はもうじっとしてはいられませんでした。
すべてをすてて、トーマス・ワトソンという助手といっ
しよに、ボストン市のある電気屋の屋根うらにたてこまりました。
そうして、話と電気とを結びつけようという、ふう変わり
な研究にとりかかったのです。

ところが、もともと電気や電
信の学者でもない先生のこと
すから、研究は時々行きづま
りました。その度に、専門の学
にすがったり、友人に意見を聞
いたりしなければなりません
でした。なかには、その研究を
かにして、



「おやおや、また『ものいうおもちゃ』の話かね、電気に話を
させようなんて、とんでもないことだよ。」
と、相手にしてくれない友人もありました。

命がけの研究が行きつまった上に、友人にまで気持ちがあつ

かいにされたのでは、気を落とさずにはいられません。けれども先生は、こんなことに負けてはならないと、自分をはげましく続けました。

二十八オの時、用事があってワシントンへ出かけたことがありました。そのついでに、有名な電気学者のジョセフ・ヘンリー博士をたずねました。そこで、自分の考えをくわしく話してから、

「しかし、先生、私にはこの研究を完成させるのに必要なだけの、電気についての知識がありません。」

と、うなだれていうと、それをしずかに聞いていた博士は、七十八オの老人とも思われぬいするとい声でいいました。

「いや、君は今、大発明をするかしないかのせとぎわにあるのだ。君はまだわかいのだから、必要があればそれだけ勉強したまえ、いやいや、君はどうしても、もっと勉強しなくてはいけない。」

日ごろ尊敬していた大科学者の口から、それほど熱心にはげまされた先生は、生きかえった思いでボストン市に帰りました。それからというものは、周囲の人々のそしりなどには、耳もかたむけませんでした。二階の屋根うらにとじこもったまま、朝からばんまで、ぶっ通しの勉強を始めました。心のくじけそうな時には、あの大科学者の、熱心なするとい声を思い出しました。

ある日のこと、先生は、知りあいの医者から人間の耳をもらってきました。そうして、気味の悪い実験を始めました。まず

一本のわらを持ってきて、その一方を耳のこまくにふれさせ、他の一方をすすのかかったガラスの上に置きました。先生は、その耳に向かつて息をふきかけたり、歌を歌ったりしました。すると、その度に耳のこまくがしん動して、わらがかすかに動きます。そうして、すすのかかったガラスの面には、ぎざぎざの線がえがき出されるのでした。

そのようすを注意深くながめていた先生は、このこまくの代わりに、うすい鉄で円板を作つて、それを電気でしん動させたらどうかと考えました。この考えこそ、やみの中にさしこんだ一すじの光明でした。

月日はどんどん流れました。あの気味の悪い実験から、やがて三年めの夏がやってきました。研究室のまどの外には、木々の葉が一日一日と緑を増して、風にそよいでいます。

きょうも相変わらず、はりがねや、じしゃくや、時計のぜんまいなどを取りつけた機械を相手に「ものいとおもちや」の研究に余念がありません。となりの室では、助手のワトソンが、先生の機械と電線でつないだ、別の機械を調べています。

その時です。「ボーン」というかすかな音が、電線を伝わって先生の機械にひびきました。先生はびっくりして、とびあがりました。そうして、顔色を変えてワトソンの室にかけこみました。

「君、君、今何をしたんだ。その機械を動かしてはだめじゃないか。」

とどなりながら、機械にかけ寄りました。先生の手はふるえています。

「ものいうおもちゃ」は、ついに電線によって、かすかながらも音を伝えたのです。研究はもうひと息です。血の出るような苦心が、それからまた続けられました。やがて年が変わり、とうとう「ものいうおもちゃ」のできあがる日がやってきました。

きょうこそ、その実験の日です。

先生は機械の前に立ちました。やがて、少しふるえをおびた先生の声が、機械に向かって話しかけます。

「ワトソン君、用事があるから、すぐきてくれたまえ。」

耳をすまして待っていたとなりのワトソンは、その時、思わず機械を取り落としてしまいました。声です、人間の声です。人間のことばが、先生のことばが、はりがねを通してほんとうに



聞こえたのです。ワトソンは、むちゅ

うで先生の室にとびこみました。

「聞こえました。聞こえました。先生のことばが、いちいちはっきり聞こえました。——先生。」

ふたりは、はげしくだきあいました。うれしさのあまり、声をあげてなきま

した。

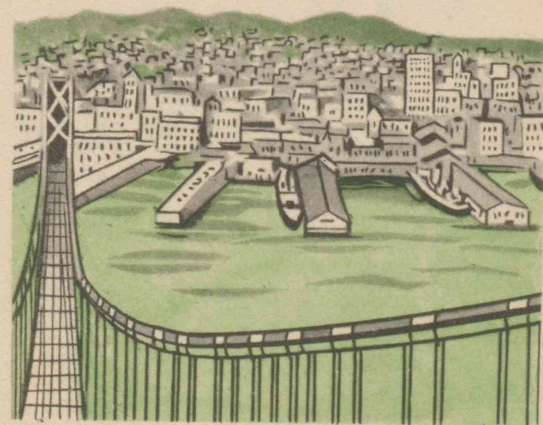
これは、千八百七十六年三月十日のことです。「ものいうおもちゃ」とは、いうまでもなく電話です。電話を発明したこの先生こそ、アレキサンダー・グラハム・ベルで、この発明は、ベルが三十才の時のことでした。

五 世界の旅

(一) アメリカの町々

私たちを乗せた太平洋丸は、朝暗いうちに、サンフランシスコの港外に着きました。

初めて見る外国の地は、ただおどろくばかりです。何を見てもきれいでめずらしく、高く大きな商店がのきを連ねています。町通りは自動車が多く、スピードがあるために、通りを横切るのはたいへんです。それに町はばが広く、電車通りには八本のレールがあ



って、四台の電車が往復しています。どこを見ても人がいっぱいです。港の入口に、ゴールデンゲートパークという、大きくて美しい公園があります。町通りには、日本人の経営する商店もたくさんありました。

夜行列車でサンフランシスコを出発し、ロスアンゼルスに向かいました。ここにしばらくして、市中を見物しました。サンフランシスコよりも大きく、ずっときれいでした。

いよいよ、アメリカ大陸の横断旅行です。まどの外のけしきは絵のように美しく、農家で作っている花畑や、野菜畑も広々としてきれいです。汽車はものすごいスピードで走ります。時間がたつにつれて暑くなってきました。まどの外にはもう家も木もなく、ただすな地ばかりです。明けてもくれてもただすな



地です。すなほこりがはいるので、まどはあけられません。五日めによくやく、シカゴ市に着きました。ここでまた一ぱくしました。世界一といわれる、家ちくのと殺場を見物しました。ここで牛、馬、ぶたなどが、毎日何千頭と殺されるそうです。シカゴは工業がさかんで、大工場のえんとつが無数に立ちならんでいます。汽車は三十何か所に向かって発着しています。近くのミシガン湖には、大きな汽船がいくつもはいつていました。あの有名なナイヤガラの大ばくふも、ゆっくり見物することができしました。

その日の夜行列車でナイヤガラ駅をたち、あくる朝、ニューヨーク市に着きました。

ここは、アメリカ第一の大都会です。今まで見てきたどの町よりも、いちばんにぎやかです。自動車もずっと多く走っています。地下鉄がものすごいスピードで走ります。レールが四本で、外側の二本がふつう、内側の二本が急行になっています。

高か鉄道も走っています。このように、交通機関の系統が、実によく整っています。世界最高のエンパイアステートビルが、空高くそびえ立つのを見あげて、ただおどろくばかりでした。さすがは、アメリカ第一の大都会であると感心しました。

ここに五日ほどいて、市中の

名所を見物してまわりました。いよいよ、アメリカとも「さよ
うなら」です。

大西洋の快速船モーレタニア号に乗って、久しぶりにまた、
船の旅行を続けます。生まれてはじめて見るイギリスを、いろ
いろと想像してみました。

(二) イギリスの工学

イギリスのサザンプトン港から夜行列車に乗り、次ぎの朝、
ロンドンのウォーターロー停車場に着きました。改さつ口の中
で少し待っていると、汽車に預けておいたトランクを駅員がお
ろしてきて、氏名の頭文字で見分けてホームに積みます。赤ぼ
うがそれを運び出して自動車に乗せます。荷物の預かり証はな

いから、乗客はかってに自分のトランクを受け取るのです。

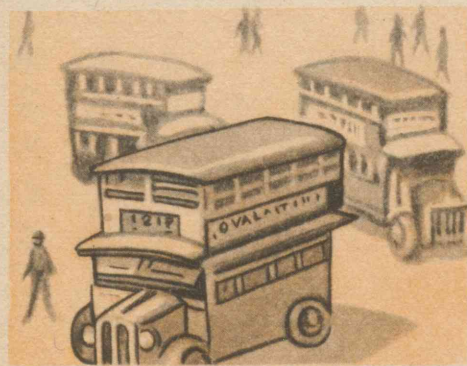
「これで一度だってまちがないのが、イギリスのえらいと
ころだよ。ほかの国でこんなことをすれば、まちがったりぬ
すまれたりするけれど、ここでは、めったにそういうことは
ないのだよ。」

おとうさんは、上陸第一歩にイギリスのいいところを教えて
くださいました。

タクシーをよんで、夜のロンドンを走らせ、バッキンガム宮
でんの前を通って、ローヤルパレスホテルに着きました。ホテ
ルは、ハイドパークと地続きの、ケンジントン公園の前です。
久しぶりに大きなベッドで、のびのびとねられます。

次ぎの日、ロンドンを見物しました。ロンドン市はイギリス

の首府で、世界一の大都會です。市中至る所にバスが通っていて、かなり遠くのこう外までのびています。このバスは赤色で、二階つきですから目立ちます。上下で六十人ほど乗れます。おもしろいことには、雨のふる日など、一階がふさがっていなくても、二階へあがってこうもりがさをさしている人があります。おかしいと思つたら、二階はたばこがふかせるからだそうです。おりたい時には、階だんのあがり口にボタンがあつて、それをおすと止めてくれます。きつぷは車しようにわたさないで、すてていきます。万事ほんとうに世話のないようにできています。



ロンドンの東の方には、グリニツチのおかがあります。テムス川が目の下を流れていて、そばには大公園があります。その公園のおかの上に、有名なグリニツチの天文台がありました。世界地図の上に、子午線れい度とした場所は、この天文台です。ここは、太平洋をハワイに行くどちゆうに通つた、百八十度線のちようどうらに当たります。天文台

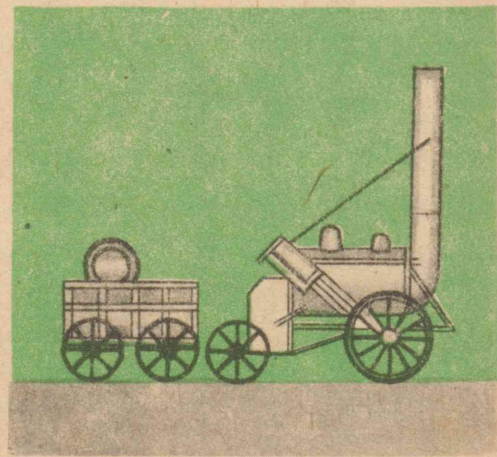
の庭に、コンクリートで長い線をかためて、そのまん中に、南から北へと向かう線が一文字にほってありました。これが子午線の印です。ほんどうの子午線は、室の中に白金で作ってあります。そのほか、天文台に



関係のある機械がたくさんありました。ここが地球の表面を測るものになるのかと思うと、ゆかいな気持ちになり、記念写真を撮りました。

ケンジントンという所には、博物館がたくさんあります。なかでも、工科の博物館はすばらしいと思いました。ここは機械ばかりで、いろいろの模型ができています。たとえば、船の所で、電気のスイッチをかってにおすと、船の機械やスクリューが動きだします。また飛行機の所では、プロペラが回転します。自動車も動かせます。ポンプもあれば、レントゲンもあります。なんでも自由に実験ができるし、わからない事は番人が親切に教えてくれます。ずっとむかし、ライト兄弟が考案したという古い飛行機もありました。形はちょうど、こもりか鳥のよう

です。電送写真の機械もあり、また歴史上有名な、スチーブンソンがはじめた作って、イギリスで動かしてみたという汽車もありました。ごく小さなもので、荷車にかんたんな機関をつけたような形です。なお、最新式の電気機関車もあってなかなかりっぱなものです。これが、これまでに発達するものを発明したスチーブンソンは、ほんとうにえらい人だと思いました。



(三) フランスの美術

パリにきて、だれでも第一に目につくのがエッフェルとうで

す。市の中心を流れるセーヌ川のほとりに、三百メートルも高
高とそびえているので、世界の名物となっています。とうは、
エレベーターでかなり上まであがれます。じょうぶな鉄のとう
ですが、あがるとゆれるような感じがします。パリの全市はも
ちろん、フランスの大平野がひと目に見えて、ゆう大なけしき

が展開します。とうの下部は、
大きなアーチになっています。

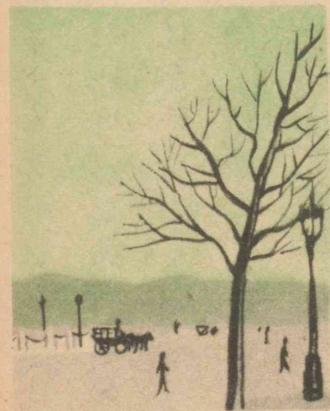
ある時、飛行機でこのアーチ
の中がくぐれるか、くぐれたら
賞金を出そうと、アメリカの人
がフランスの飛行家とかけをし
ました。それがラジオや新聞で



伝えられて、大評判になりました。あるゆうかな飛行家が、
これに応じました。いよいよその当日は、たいへんな見物人が
とうのある公園に集まり、息をころして飛行を待ちました。は
たして成功するかどうかで、大さわぎでした。しばらくすると、
空の一方に、飛行機のばく音が聞こえ、その軽快な機体を現わ
しました。やがて、とうをねらってぐんぐんとう下し、付近
の屋根とすれすれにとんで、スーッととうのアーチを通りぬけ
ました。観衆はそのみょう技にすっかり舌をまいてしまいました
た。ところが、エツフェルとうのちよう上から、ラジオ放送用
の太いアンテナ線が地上に引いてあったのです。アツというま
に、それにひっかかってしまいました。飛行機は地上についら
くして、ばく発と同時にもうもうと燃えあがりました。すぐ救

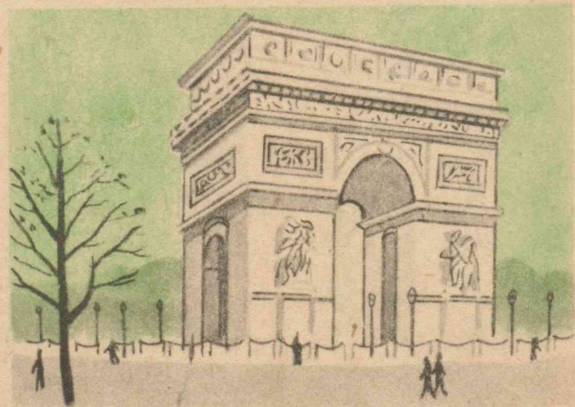
助にかけつけましたが、この勇士はついに絶命しました。
エツフェルとうには、まだこのほかに、いろいろな話のこ
っています。

パリは、家の建てかたも、ならびぐあいも、広場や公園など
の配置も、すべて美術的です。町通りは、たてから見ても横か
ら見ても、また空から見おろしても美術的です。有名ながいせ
ん門から四方八方に、美しい大通りが星
の形に走って、シャンゼリゼーの大通り
にのびています。コンコルドのゆう大な
広場にならぶチュイルリー公園、公園に
そって走るリボリーの、どうどうたる五
六階の石造の大家屋が、同じ高さできち



んどならんでいる美しさは、世界に類が
ありません。これに続くフアンドームの
円形の大広場、世界一の高級なほう石・
そう身具を売る商店、会社、ホテル、四
階くらいまでのびのびとしげったがい路
じゆ、グランブールパールの四季のなが
めは、世界無比でしょう。

パリは、形のうえでこんなに美術的で
あるばかりではありません。ルーブル絵
画館、ルクサンブール美術館、ロダンの博物館等があつて、世
界的な画家やちようこく家の大けつ作が、古代から近世まで何
百もそろっています。そうして、グランパレーやプティパレー



の常設美術館では、年中展らん会がもよおされて、現代の画家の作品を見る事ができます。だからパリは、まったく美術の町です。

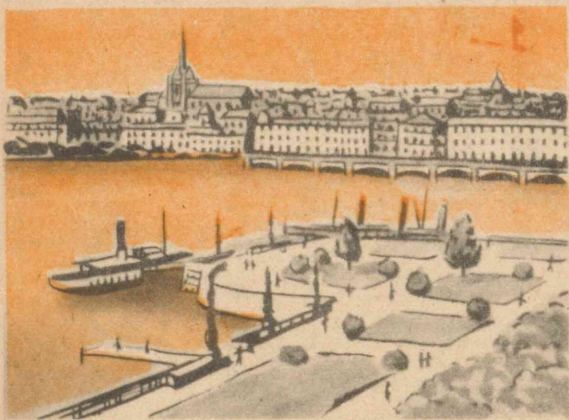
パリの人々は、こういうかんきょうに生まれて、子供の時から古今のけっ作に親しんで育ちます。だから、線と色とについて特別の感じをもっています。女中などでも、ちよつと何かの説明をもとめると、すぐにじょうずなデッサンをかきます。

(四) スイスの風景

自動車でパリをたつて、フランスの大平野を走りました。小さないなかの町や森などを左右に見過ごして、その日のうちにジュネーブ市にはいりました。大きなラック・ラモンの湖辺に

ある、けしきのよい都会です。アルプス山脈が目の前に見えて、じつにそう快です。土地の人の案内で、市のこう外までドライブをしました。ここでまず感心したのは、町の衛生設備がよく

ゆき届いていることです。至る所清潔で、道路にもしばふにもちり一つ落ちていません。また、道路で子供が遊んでいないことです。車道が子供が歩いていたら、車にストップしたなどという決まりはありません。その上、自然を愛する国民なので、すすめ、うぐいすなども、人をこわがらず、私たちのそばに寄ってきてにげようとしません。スイスは花



の多い所です。どんな家にも、まどには花のはちがかざってあり、二階・五階のまどにも草花がのぞいていて、自然に心がなごやかになります。スイスはまた、とけいの製造や、細かい機械、レース、薬品等の製造が盛んで、それらの工場が自動車からもよく見えました。

ジュネーブに一ぱくして、そのあくる日ベルン市に行きました。スイスの首府で、ここも風景のすばらしい所です。いろいろな役所や名所を見ましたが、特にこの町では、レースの製造がヨーロッパでも有名だということです。とけいも品質の良いのが多量に生産されます。水銀やアルコールを使わないで、金属ののびちみで温度を知る、かい中どけい型の寒たん計、むねにぶらさげて歩けば、歩いたきよりが自然にわかる歩度計、

山にのぼれば、自然に高さを示す高度計、そのほか、いろいろなめずらしい品物があります。

スイスは、「ヨーロッパの屋根」といわれて、ヨーロッパでいちばん高い所です。アルプス山脈には、五千メートルほどの高い山があって、スイスの雪どけの水は、東はドナウ川となってオーストリー、ハンガリー、ルーマニアと、いくつもの国を流れて、ソ連の向かい側まで行きます。また、北に流れるライン川は、ドイツとフランスの国境となり、オランダに流れます。また、西に向かって流れるローン川は、フランスの平野を南へ南へと走って、マルセイユの近くで地中海へ流れこみます。そのほか、スイスの南部の湖水からイタリアに流れる川もあります。スイスの高い山のふもとは、たいがい牧場になっています。

スイスの牛には、首に大きな鈴がつけてあります。それがチリンチリンと鳴って木だます音は、いかにも不戦国スイスの永久の平和を表わしているように思われます。しかも、スイスのミルクや、クリームや、チーズや、バターは、とてもおいしいのです。だから、高い価で各国に売り出されています。少し山にはいけば、目のさめるようなお花畑があり、氷河が、手のとどきそうなどころにながめられます。

(一五) イタリアの古都

私たちの乗った夜行列車は、長くつのかっこをしたイタリア半島を南へ南へと走り続け、あくる朝九時ごろ、イタリアの首府ローマに着きました。

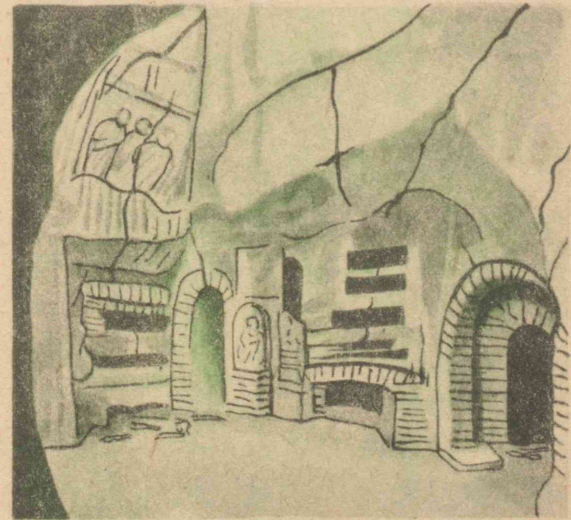
ローマは、紀元前七百五十何年もまえにできた古い都です。今から二千七百年もむかし、まだ今のヨーロッパがひらけないうぶんにできたのです。その時代にあった宮でんだの、役所だの、住居などの遺せきが市内に残っています。宮でんの大きな石の柱や、土台石などがそのまま保存されています。早くから文明が開けて、美術、工芸、文学などが進んだのもここです。だから、古い大きな寺院や、名所がたくさんあります。世界に有名な絵画だの、ミケランゼロのちょうこくだのがたくさん見られます。ティベル川というイタリア第一の大川が町の中を流れ、七つのおかが古代ローマの町のまわりにあります。むかし、土人とライオンとを戦わせて見物した、コロセウムという、大きな三階建ての石造のとう技場も、半分以上こわれたまま保存



くと、地の底の池に出ます。そこはむかし、信者がかくれて集まった教会だったのだそうです。夏なのに、ぞうつとするほどの冷たさでした。

ローマのまん中に、バチカンという、大理石造りの町があります。ローマ法王がお住まいになっている所です。このほかなお数えきれないほどの名所、旧せきがあるのです。ローマを見物するには、いく日あっても足りません。ローマを見なければ西洋の歴史はわかりません。ちょうど、なら・京都を見なければ、日本の歴史がほんとうにわからないのと同じです。さて、私たちは、ローマから南へ行っ

してあり、三千人以上一度にはいれる、カラカラという、大きな浴場のあともあります。浴場の大きな石のかべを見あげると、そのむかしのローマのすばらしさがしばれます。また、カタコンブという寺院のあとに行くと、地の下の暗やみの岩に、せまい道がほってあり、かた側のかべのだんだんに、がいこつがたくさんならべてあります。ここは、むかしの墓なのです。ぼうさんがろうそくに火をつけて、そこを照らしながら案内してくれます。石だんをぐるぐるまわりながらおりて行



ナポリというけしきのよい港を見物しました。ベスピアス火山がすぐ近くにそびえていて、なんともいえないよいけしきです。そのまた近くに、ポンペイという町があります。ずっとむかし、ここは火山の大ばく発があつて、火山ばいやよう岩のために、何百年もうまっていたのをほり出した名所です。ヨーロッパには、どこの国にも地しんがないのですが、イタリアだけにあるのだそうです。ベスピアス火山は、今もなお、しずかにけむりをはいています。よく晴れた日など、ナポリの海辺に立ってながめるそのすがたは、まさに天下の絶景です。

(六) インドの子供

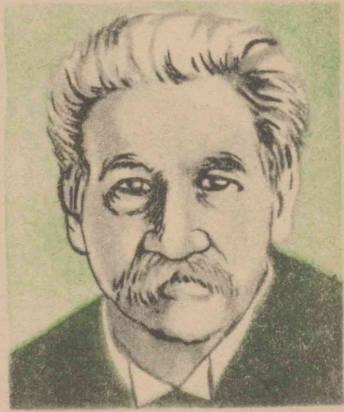
インドの子供は、日本の子供より早く育ちます。インドには

何十もの人種があつて、ある人種はまったくはだしです。またある人種は、くつをはいています。ぼうしも、頭にまきつける白布も、人種によつてちがいます。子供でも暑さになれているとみえて、ずいぶん強いの見ました。その子は六・七メートルもあるぼうの先に、横にもう一本ぼうをくくりつけ、たくさんのせんとく物をかけて、それをささげて暑い日中をぶらぶら歩いていました。せんとく物を天日にかわかしているのです。私どもは日しゃ病をおそれて、ヘルメットぼうに日



よけ目がねで、しかも朝夕だけしか外出しないのに、この子供たちは、日中ぼうしもかぶらずにそうしているのです。インドの人は、おともも子供もよく英語をしゃべります。だが、アクセントの弱い、みよな英語です。インド語は、二百も種類があるそうです。面積も広いし人口も多いので、ことばもいろいろちがうのでしよう。

町角などで、小さな青い木の葉を二つ折りにした物に、ビンロウジュの実で作った食べ物を入れて売っています。子供もおともも、銅貨を出してそれを買います。そしてなかみを食べては、ペツペツと道につばをはきます。ビンロウジュの実のしるが赤いので、そのつばが血のように見えます。これは、暑い気候にたえさせるためにくふうされた食べ物だということですよ。



六 新しい足あと

(一) 原始林の明星

1

アフリカの夜はふけて、遠くでははげしい川の水音がひびいていた。ふと高いヤシの木の上をふりあおぐと、エメラルド色の星が、いっばいに光りかがやいている。さっきのはげしい雨は、どこかにいってしまった。風がヤシの葉にさらさらと鳴りわたる。

シュバイツァーはかいちゅう電燈をまくらもとから引き寄せ、ふと、キャンプの外の不思議なけはいに耳をすました。か

れは、電燈をつけずにそばにぐっすりねむっている助手のロコ
のせなかを、そっとゆり動かした。するとロコは、暗やみの中
で、ハッと目ざめたらしく、声をひそめていった。

「先生、何かきてます。私もさっきから知っていました。ライ
オンかもしれないですね。」

とからだをにじり寄せてくると、シュバイツァーの耳もとに口
を近づけていった。

「どうするかね。」

「だいじょうぶです。私が追っばらいますから……。病人は元
気になってるでしょうか。」

ロコが病人というのは、きのうの夕方、ロゴオヌヒルコの部
落から連れてきたひとりのおむすめで、熱病にかかっていたので

あった。そのおむすめは、小さいこのキャンプのかたすみにつ
たヤシの葉のベッドに、かよけのふくろをかけて、日がくれて
からは静かにこきゆうを続けていた。
そのそばに、父と母の土人が、ねむ
らずにすわりこんでいる。

「夜が明けて太陽が出てくると、き
っとよくなるだろう。心配しなく
ともいいんだ。それよりも、ライ
オンはだいじょうぶかね。」

「先生、電燈をお貸しください。ラ
ンプをつけますから。」
ロコは、シュバイツァーから電燈



をうけとると、キャンプのてんじょうからつるされてあるランプに火をつけた。老人の土人たちはすわったまま、さっきからやはりライオンの近づいてきたのを感じていたらしく、目でロコにうったえていた。ロコはキャンプの外にはいだしていった。電燈を持って林を照らした。間もなくたき火が燃えはじめた。

シュバイツァーは、その後からやはり角ぶえを持って出ていった。ロコは草の上からだをふせて、しきりに電燈を照らしつけている。シュバイツァーは、角ぶえをふいた。するどい角ぶえのひびきが、林の中に遠ざかっていった。

するとすぐ、シュバイツァーのそばのヤシの林の中から、地ひびきを立てて黒いけだものがとび出してきたかと思うと、た

き火とは反対の方角に走って行く。

ライオンだ。

ロコは、たき火の燃えさかるのを見ながら、三頭のライオンのにげていくのをじっと見つめていた。

「ロコ、あとはいないのかね。」

「あぶないところでした。もう五分もおそければ、キャンプはひとたまりもなくやられるところでした。先生、私が悪かったです。ロコはねむってしまったんです。」

ロコはそういいながら、シュバイツァーの立っているそばにひざまずくとなみだを流した。ライオンの足音はもう聞こえない。

「いいんだ。そんなことを気にしなくなっただよ。君は

きのうは五十キロも歩いたんだもの。あのむすめをひとり救ったんだからね。もう少しおそれれば、あのむすめは死んでしまったのだ。君の強いからだがあったので救われたのだ。」

「いいえ、それは先生のためです。ロコは死にそうならむすめをただおんぶしてここまで運んできただけにすぎません。」

「さあ、あのむすめにもう一度注しゃしておこう。そして、ひとねむりしよう。ロコ、つかれていたのにすまなかつたね。」

「いいえ、私が悪かったです。あまりつかれて、つい、うとうとしてしまったのでした。」

「さあ、キャンプに帰ろう。」

今のさわぎで、土人のむすめは目をさましていた。しかし、熱がなくなっているので、すっかり元気づいていた。

「さあ。」

シュバイツァーは、おろおろするむすめのうでをやさしく取りあげると、静かに注しゃのほりをうちこんだ。

ロコと、こうしてアフリカの土人の部落を歩きはじめてから、シュバイツァーは、もう十年にもなっていた。原始林をわたり川をこえて、かれも今は五十五才だった。一日として、ぐっすりねむったこともなく、ひとばんとして、まどらかなゆめをむすんだこともなく過ぎてきたのだった。

シュバイツァーは、まだたき火のそばに立っているロコのそばにいくと、その手を固くにぎった。ロコに生命を救われたのが、いくたびであろうか。シュバイツァーは、ふとなみだぐんで、高くきわまりない夜空をおおぎ見た。星はいよいよかがや

き、光りあいながら北に続いている。それは、シュバイツァーが旅立ってきた、十年前のヨーロッパの夜空にも続いているのだった。

「ロコ、休みましょう。」

シュバイツァーはロコの手をひく。

「はい、間もなく夜が明けましょう。星が光を増してきましたから。」

ロコは天をさした。

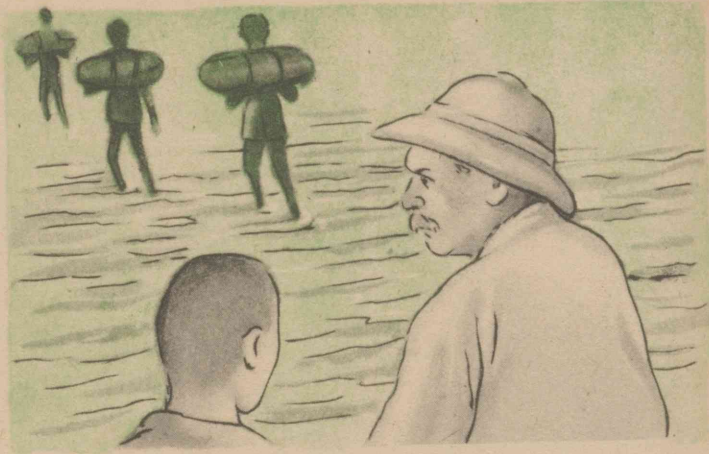
2

キャンプをたたんだのをせなかにくりつけた土人が五人、シュバイツァーの先に立って、しぶきをあげて流れる川の中の石を伝ってわたって行く。

ここはコンゴ川の支流であった。この川はワニが多いことで、土人たちの間にもおそれられているが、きょうの土人たちは、そんなことは知らぬような顔をして、ゆかにに土人の歌を歌いながら歩いて行く。

夕方までにサラ族の部落に着く予定だった。土人たちは、サラ族のものでシュバイツァーをむかえにやってきたのである。

ヤド湖は美しい湖である。しかし、川の中はワニがうようよし



ているのだから、うっかり石だと思って足をおろすと、それが
むくむくと動きはじめからあぶなかつた。

ロコは長いついで、水の上にわずかに出ている石は、残らず
こつんこつんとこづきまわしてから足を進めるといふ用心ぶり
である。

「ロコ、もうあの人たちは向こう岸にわたってしまったね。」

「はい、あの人たちは、命をそまつにすることを、何とも思っ
ていないのです。せつかく先生に病気をなおしてもらっても、
ワニやライオンに命をくれてしまうのが、たくさんいるので
す。」

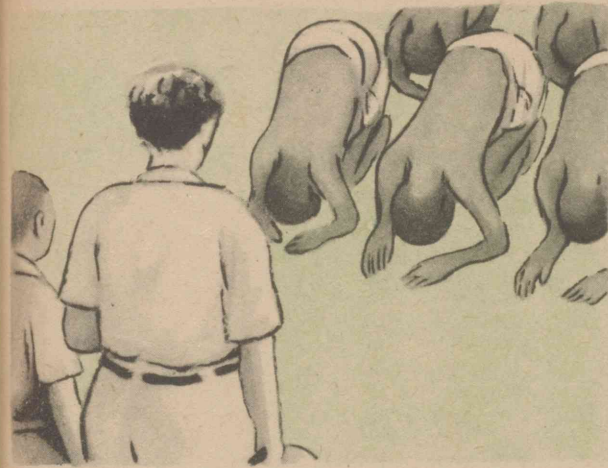
シュバイツァーは、この少年と歩きはじめてから、実に多く
のことをロコから教えられた。ロコは、シュバイツァーから、

手当をしたり、注しやをしたりすることを次ぎ次ぎ学び、シュ
バイツァーはロコからアフリカのことを学んできたのだった。

ロコは、ドイツ人のほう石と薬を売りにきた男と、サラ族のし
ゆう長のむすめとの間に生まれた混血児であった。父はもうな
くなって、ロコは母といっしよに、しゆう長の家の庭先に、別
の小さい家を建てて住んでいた。

川は、水の流れのはげしいのが、アフリカの特ちょうだった。
石が水の上につき出しているかと思つと、深く青くふちがよど
んでいたりする。ロコとシュバイツァーが岸に着いた時、土人
たちは何やらわめきながら、しきりに手をたたいていた。そこ
には、ヤシの葉であんだかごが置かれてあつて、いまままで見た
ことのない土人が、四人もあらたに顔を見せている。かれらは

地べたにひざまずいてシュバイツアーをむかえた。それはサラ族のしゅう長が、かごでシュバイツアーをむかえに出ているのだった。



しかし、シュバイツアーは、キャンプの道具だけをかごにのせて、自分は土人たちといっしょに歩きはじめた。両手がかかえきれぬほどのビンロウジュのえだえだを、小さいさるがキイキイと声をあげてとびまわっているかと思うと、はねのまっかな小鳥たちがかたさきにとまったりする。

「ロコ、サラ族の部落はもうすぐだね。」

シュバイツアーはきいた。

「はい、もうすぐです。あのヤシの林をこえると、部落の土のへいが見えてきます。」

「どうしたんだらうかね。みんながかごをおろしてしまったようだが……。」

「あれは先生を乗せるためでしょう。部落にはいりますと、みんなが先生をむかえているんです。だから、少しだけ乗ってください。」

「いや、このままでいい。その方がいいよ。ねえ、ロコ。ぼくたちはみんなおなじ人間だから。かごには、からだのよわいものに乗せよう。」

キャンプの道具をのせたかごと一行は、間もなく部落に着い

た。高い土べいがめぐらされ、そこには門に番兵が立っていた。門をはいると広い畑が続いている。畑の中の道のそばに、サラの部落の人々が着かざってならんでいた。この土べいは、むかし、土人がたたかい続けたころのなごりであった。ほかの部落から、せめたてられると、まず高い土べいで防いで、そのあいだ、土べいの内側にある広い畑に食べ物を作ってたてこもる。

しゅう長の老人、ロコの祖父にあたる人がやってくる。

部落は、ふえやたいこでひっくりかえるにぎわいだ。

今度、ここのヤシの木の林の中にシュバイツァーの病院が建つのだ。

3

シュバイツァーのキャンプに、ロコの母が、パンとカバの肉

の焼いたのを運んできた。かの女は、ロコがシュバイツァーにでし入りしてから、どんなにその成長を望んできたことであるう。

「先生、ロコのことにつきましてお願いがございました……。」

「そののいすにおかけください。」

「はい。先生、私の子は神の祝福をうけているのでしうか。」

この地に光る小さな星となることができましようか。」

「どんな人でも、それはできます。その人の心に、いつも、星となろうとするたましいのよび声が続いていたならば……。」

「ロコにはそれがございませうか。」

「りっぱにあると私は信じてきました。ロコ君は、今やサラ族の美しい星です。私は、ロコ君のような人が出てくるのをさ

がしもとめながら、このアフリカのおくをめぐっていたひとりの旅人にすぎません」。

「ロコを小さい星にしてやってくださいまし」。

ロコの母は、なみだをながしてキャンプを出ていった。柱をけずるおのの音や、歌声が聞こえ、そこからは、ヤシの木の林と原始林と川がながめられた。

「先生、最後の板が打たれますから、先生に出ていただきたいとのことです」。

ロコがやってきていった。

それは、はじめての病室のことであつた。

シュバイツァーは畑をこえて、林の中に行く。そこには、どんだん柱がけずられていて、はじめての病室ができあがりかけていた。

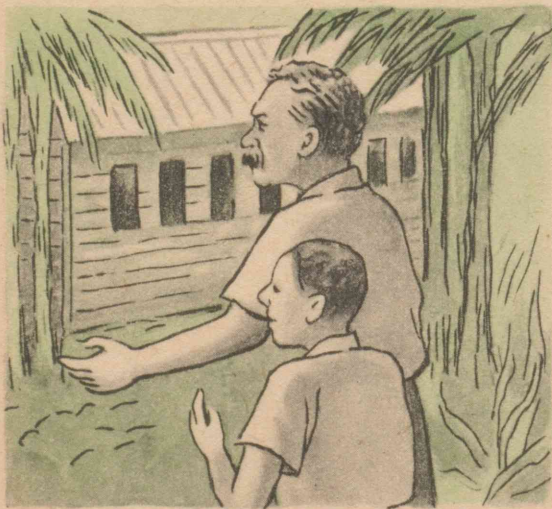
「ロコ、あの病舎の名はどうしよう……」。

「先生、こんな名前はいかがでしょう。星の病舎、ヤシの病舎、ピンロウジュの病舎といったふうに……」。

「そうだ。ロコ、光という病舎もつくろうね」。

シュバイツァーは、その夜、はじめて静かにねむった。ロコがねむらずに夜明けを待つことも、これからはなくなるだろう。

シュバイツァーは、病院の一室で、



遠くの部落から病人があると知らせてくれば、喜んでロコと出かけていった。

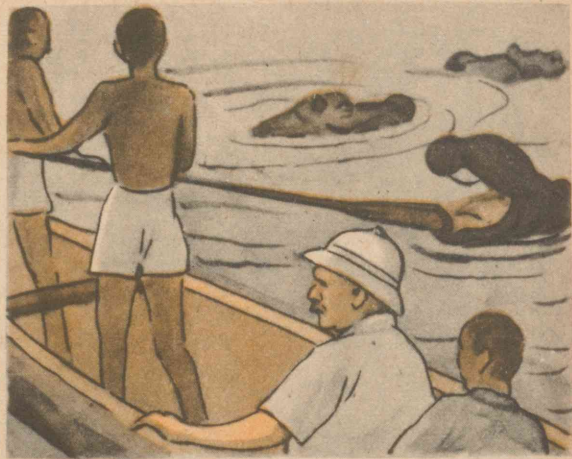
今は、ヨーロッパから、ふたりの助手もやってきた。

それは、暑い日の午後のことであった。

二十キロほどの川向こうの部落から、熱病の病人が三人ほど出たとの知らせで、シュバイツァーはロコを連れて出かけた。

川には、土人たちが丸木船をしたくしていた。三人の土人がその先にやりのついた、かいを持っている。それは、川の中でうようよしているかばをよけるためだった。

川のまん中に出ると、黒い岩のように、かばがむっくりと大きくなかを出しては、丸木船に近寄ってくる。すると土人のひとりか、やりをひらめかして、かばの鼻先をつきとばす。丸



木船の下がゆらゆら動いたかと思うとかばがひよいと船のそばに現われてくる。土人は目を光らせてさげぶ。

「ピフテキにしてやるぞ。いいか。ピフテキに——」

ロコは、やりをひらめかしてかばのせなかをひとつきにしようとする土人をおさえる。

「やめてくれ。おい、やめてくれ。病人の所に着くまでは、そんなことはやめてくれ。」

土人ははっと気がついたようにやりを取りなおすと、かいた方方で水をかき、船を進めた。

「ロコ、君のいつかいつていた、命をそまつにするというのがこれだね。」
シュバイツァーは、こういってえ顔をつくると、むねに十字を切った。

丸木の船は、かばがぽっかりぽっかりとすがたを現わす川の上を、やりのかいをまぶしい光にひらめかせながら進んでいた。川の向こう岸では、土人たちが手をあげながら、ホーイ、ホーイとよんでいる。

ロコが、丸木船の上でじっとひとみをすえながら、薬の調合法を書いた本を読み続けているのを見て、シュバイツァーは、このあれ果てた土地にもようやく新たな芽ばえが育ってきたと感謝するのだった。

(二) 南極のスコット

千九百十年十月、一せきの船が、オーストラリアのメルボルンに入港した。南極たん検に向かうスコットらに乗せたテラノバ号であった。本国イギリスを出発したのが六月、すでに地球の半分をまわったが、前とはこれからである。

スコットは千九百一年にも、南極たん検隊長となって、人間の知らない世界にはいり、そこで大きな陸地を発見したり、いろいろの調査をなしとげ、一度は極地に向かつてとっ進をはじめたが、食べものの不足からくるおそろしい病気のために、おしくもひき返したのであった。

その後、北極には、はじめて人間の新しい足あとが印され、残ったのは南極だけとなった。見わたすかぎり雪と氷の南極大陸を一日もわすれることのできなかつたスコットは、まえのたん検をさらにたしかめ、こんどこそ極地に達しようとかたく決心して勇ましく出発したのであった。

メルボルンに着いたスコットにとって、思いがけない知らせがあった。それは、ノールウェーのたん検家アムンゼンが、同じ南極をめざして出発したというのであった。国をあげての熱れつな声えんに対しても、南極一ばんのりに成功しなければならぬスコットにとって、意外な競争者があらわれたのである。スコットの責任はますます重くなった。

十月二十八日、テラノバ号はニュージーランドのリトルトン

に着いた。ここは南極たん検の基地で、スコットはこのまゝも、ここで最後の準備をととのえたのであった。

食りょうや燃料はもちろん、テント生活の用具や材料をはじめ、科学的調査のための機械器具など一切の積みこみを終り、全員船に乗った。隊長スコット以下五十三名、寒さに強いといわれる十九頭の小形の馬、二十三びきの犬、三台のモーターそりと、四百トンをはこぶ石炭を積みこみ、準備はととのった。

十一月二十六日は、リトルトン出ばんの日であった。各地か



ら祝電が集まり、見送りの特別列車まで用意された。港内一ぱいにどまった船のかざり、黒山のような見送りの人々、打ちふる手やハンカチ、ぼうし——。その中をテラノバ号はすべるように港を出て行った。まもなく人間の世界と別れるのである。

長い長い大洋の旅が続いた。南い五十度近くなると、南半球の暴風が待ちかまえていた。十二月の初めには、めったにないひどいあらしに出会った。

わずか七百トンあまりのテラノバ号は、高さ十メートルもある大波と、ふきすさぶ風にもまれたが、全員力のかぎり、ゆれる船内をまわって、動き出す荷物をつなぎとめたり、流れこむ海水を必死になってくみ出したりした。ただ、はい色のアホウドリや、まっ白な雪海ツバメが、人間の苦しみを知らぬ顔でと

びまわっていた。

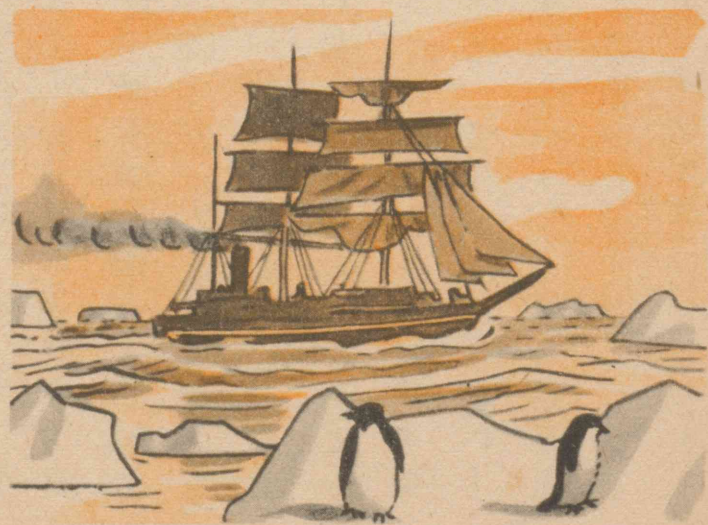
やっどあらしの海を過ぎると、うってかわった快晴の日が続いた。西の方はるかに氷山が一つ、まぶしい日光にキラキラとかがやくのが見えた。日のたつにつれてその数は増し、船はいよいよ氷山のむらがる南極の海にはいつて行った。

明けてもくれても、船は氷山と流氷の間を進む。海はおだやかで、明かるい太陽に氷山はうすべに色にくれかけ、かげというかげはむらさき色にかわる。夜中といっても、太陽は南の水平線にしずんだばかり、北の方を見ると、空も水もバラ色にもえた、やがてうすみどり色にくれかけていく——。その美しさはこの世のものとも思われなほどであった。

すばらしいのは氷山のながめである。南極大陸からおし出さ

れた大きな氷のかべの一部が、次ぎ次ぎに分かれて北に向いてたまたよってくる高原のような氷山は、水面上の高さだけでも五六十メートル、はばは数百メートルもあって、そのはしは、切りたったがけになっている。

ひょうきんなペンギン鳥が氷の上からキョトンと船をながめたり、ジャブんと水にとびこんでは、ヒョッコリ水面に出る。アザラシが、大きなからだで水中をやのように泳ぎ、ペンギン鳥をとって食



べたりする。時には三十メートルをこえる白ナガスクジラが、すぐそばで、ゆうゆうとしおをふきあげる。一同は苦しきもわすれて、めずらしいけしきに見とれるのであった。

その間にも時はようしやなくなつて、年もくれ近くなった。海の氷は次第に小さくなってきた。ついに最後の氷の流れを過ぎ、七百キロの氷海を後に、広々とした南氷洋最後の海に出た。あと六百キロで、ゆめに見た南極の大陸、目ざすロス島の上陸地が待っているのである。

「陸地だ、陸地だ。」
「陸地が見えるぞ。」

十二月三十一日の夜、けたたましいさけび声に、船のかんぱんは隊員たちでうずまった。夜といっても南極の夏の海、太陽の光は一面にあたりを照らしている。

「どこだ、どこだ。」

目をこらして見ると、見える見える。待ちに待った南極大陸がくっきりと白く水平線にういて見える。新年を上げる真夜中のかねの音と共に、船中は喜びの声で一ぱいになった。

新しい年も明けて二日、目的地ロス島は、いよいよはっきりと見えてきた。島の火山からふき出すけむりがななめになびき、白一色の島のはしは遠く水平線に続いている。喜びに勇む人々を乗せた船は、次第に島に近づき、島の西岸づたいにマークマードわんに入り、小さなみさきを上陸地点に選んだ。

一月五日、いよいよ上陸を始めた。馬・犬・食りよう・燃料・モーターそり、それから基地の小屋を立てるのに大切な建築材料などをあげる作業は一週間もかかったが、休むひまもなくすぐに次ぎの仕事を始められた。

それは、基地の建設と、次ぎの年の春、南極にとっ進するための準備である。小屋の建築をはじめる一方、一月二十四日には、と中の食りよう貯蔵所を作るため、最初の旅行隊が出発した。

南極までの道は遠い。と中に中つぎの基地をいくつも作らなければならない。貯蔵する食りようを大急ぎで特別製の



ふくろにつめ、馬そりや犬そりに山と積んで基地を出発し、次ぎ次ぎと小屋がけをして、そこへ食りようをうずめるのである。

氷のういているあぶない所を過ぎて、安全な氷原にあがり、二月初めには、第一、第二、第三の中つき所を、次ぎ次ぎに作っていった。ここで、弱った馬をひき返させ、スコットら七人は、さらに犬そり三台、馬そり五台をひきいて南に進み、月の半ばごろ、準備基地のうちいちばん南でいちばん大きな一トン貯蔵所を作りあげた。ロス島の基地からおよそ二百五十キロ、貯蔵所は雪を積みあげ、その中に食りよう、燃料、馬のかいばなどをうずめ、そのいただきに目印の旗を立てた。貯蔵した物が一トンあったので、この名がつけられたのである。

そのうちに、南極には冬が近づいてきた。二月は秋のはじめで、真夜中の太陽は南の地平線を横に動き、やがて低い太陽が一日のうち、わずかに地平線にしずむようになる。冬の近づいたしるしである。

一トン貯蔵所を最後に、四月半ばまでには、一同ロス島的小屋に帰った。日がたつにつれて、太陽の見える時間はいよいよ減っていき、四月二十三日、地平線上にわずかのぞいた太陽は、それから四か月の間、昼も夜も、とうとうそのすがたをあらわさなくなった。長い長い南極の冬がきたのである。スコットたちは、冬ごもりの生活にはいらなければならなかった。

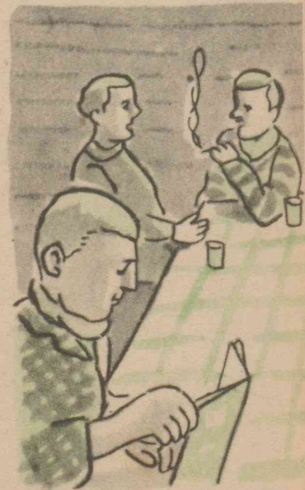
小屋のかべは二重にはり、その間に海草をほして作ったものをつめて、外の寒気をさえぎるようにした。小屋の中にだんろを置くと、冬もあたたかであった。小屋を中心に、馬小屋、犬

小屋、倉庫などが建ち、小さな村ができた。

冬ごもりの間にも、気象の観測をしたり、生物の標本をさい集したり、馬や犬をならしたり、食物にする魚をとったり、毎日の食事のことなどいろいろの仕事がある。一同は日課をきめて規則正しくくらしした。また、ピアノ、ちく音機をはじめ、いろいろの遊び道具、いろいろの書物まで備えて、生活を楽しくするよう工夫した。一同は、スコットを中心に、世界の果てにすることもわすれて、毎夜おそくまで楽しく話しあい、これからの計画についていろいろと研究をおこたらなかった。



この間に、スコットにとって二つの大きな心配があった。その一つは、競争相手のアムンゼンが、別の基地にいたことが確かになったことである。いま一つは、犬と馬についての手ちがいであった。たよりにした馬は寒さに弱く、次ぎ次ぎにたおれて、残ったのはわずかに十頭、馬のかわりになる寒さに強い犬も三十二ひきで、アムンゼンの用意した百十六ひきにくらべるとまことに心細かった。



しかし、スコットの勇氣は少しもくじけなかった。長い冬も八月になるといよいよ春の近づいたことが感じられ、基地は次第に生き生きとしてきた。準備は整い、今はもう春の太陽を待


つばかりとなった。

3

八月の二十五日、待ちに待っていた太陽が、はじめて北の水
平線上にその一部をのぞかせた。春がきたのである。スコット
以下全員、喜び勇んで出発の準備にかかった。科学の調査隊は
もちろん、全員この夏こそ南極をどめざしているのだ。

ところが、出発まぎわに思いがけない故しようが次ぎ次ぎに
おこって、出発は日一日とおくれた。先発のモーターそり隊の
出かけたのが十月二十四日、馬そり隊の出発は三十一日になっ
てしまった。この二隊は八十度三十二分の地点まで進み、そこ
でスコットの本隊を待ち合わせるようになった。

もう真夏に近い十一月一日、スコットら八名の本隊は、めい
めい一頭ずつの馬そりをひいて、広々とした白い野原の果てに
向かって出発した。



出発のおくれたうえに、また思いが
けない故しようがおこった。それはさ
きに出発したモーターそりであった。
残っていた二台が二台とも故しようを
おこし、まったく使いものにならなく
なった。スコットは、モーターそりの
機械の力で、たくさんの貯蔵食りよう
を一気に運び、人間や動物のほねおり
を少なくしようとしていたが、今となっては、そのほねおりが

逆に人間に加わることになったのである。

基地から南極までは千五百キロもある。その間、はじめは氷河に着くまでの氷原上の行進、次ぎは氷河の横断、最後は南極まで高原の上を行くのである。

はじめの氷原をこえるのに、予定よりもはるかに多くの日数がかかった。それでも、一トン貯蔵所からさらに南へ、第一、第二、第三と貯蔵所を作っていった。その間まる一か月の行進は、まったく人間の力の限りをつくしたものであった。

天気の良い日は風が無く、日はキラキラとかがやいて、重苦しい防寒具をつけたからだは暑さにうだる。にわかにはげしいふぶきに変わると、たちまち手足の指はどうしよういにかかる。馬は次ぎ次ぎに弱り、とうとう一頭のこらずうちころさなければ

ならなくなつた。馬の苦しみをなくするためにも、食りようを節約するためにも、はるばるいつしよにきた愛馬をうたなければならない。——。なんといいたましいことであろう。

十二月十日、いちばんの難所ピアドモア氷河を前にして、人が馬にかわり、四人一組になって引くそりが三台、それに犬そり二台で進むことになった。

世界最大のこの氷河は、広い所でははばが七十キロもあり、所々に底知れぬわれめがある。この上を人間が、そりを引いてのぼるのである。スキーがきかなくなる



と、それを引いて行く。一足一足六七七十センチもある雪にもぐ
る。こうして、氷河の中に、第一、第二、第三と貯蔵所を作りあ
げたのは、年もくれかかるクリスマスのころであった。

いよいよ最後の高原を進むことになった。これは二組八人の
とっ進隊が行い、ほかのものは、北に向かつてひとまず帰るこ
とになった。とっ進隊は一日中太陽を頭上に、白銀の中を進ん
で第八の貯蔵所まで作り、一月の三日、ついに南い八十七度三
十二分、海ばつ三千メートルをこえる南極の高原に立った。

ここでスコットは最後の準備を整えた。食りよりのつごうで
八人が全部行くことはできない。第一のとっ進隊だけを残し、
あとのものはひき返さなければならぬ。隊長スコットをはじ
めウイルソン、パワーズ、オーツ、エバンズの五人が、最後の

とっ進をすることになった。

五人は、ひき返す同志に、めいめい家族への手紙を預け、固
いあく手をかわして、いよいよ極地に向けて出発した。

4

はてしない高原、れい下十七八度から二十三度の中を進み、
テントを張ってはとまり、また進む。苦しいけれども、今まで
の苦勞にくらべるとなんでもなかつた。最後の目的地南極へ着
く希望で、五人は勇気をふるってとっ進したのである。

一月十六日、五人は相変わらずだまったままそりを引いて行
進していた。南い八十九度をこえると、いよいよこん難となった
が、朝から十四キロ進み、一時ごろ昼食、二時ごろ出発してま

た一時間ばかり進んだ。

その時である。五人の中のひとりがハツとした。行く手の氷原に黒い旗のようなものが一本、風にはためいているのを見つけたのであった。一同はけたたましいさけび声をあげながら足を急がせた。近づけば近づくほど、みんなの不安はいよいよ確かなものになった。

旗はそりからはずしたらしい木材に、ありあわせの黒いきれをくくりつけたものであることがわかった。

よく見るとあたり一面に、そりやスキーのあとがあり、犬の足跡も入りみだれてついていた。そればかりか、旗のすぐ



そばには、人がキャンプしたあとまではずっきり残っていた。

南極までわずか二十六キロの所である。人類の歴史始まってから、まだひとりとしてふみこんだことのないこの土地に、こんな足あとがあるとは――。

五人は、いちように競争者アムンゼンを思いおこした。ひと足先にかれが極心に着いたことはもう疑う余地がなかった。

「おそろしい失望だ。盟友の諸君にはほんとうにすまない。いろいろな感じておねがいだ。五人で話し合ったが、とにかくあすは極心まで進もう。あとは全速力で帰らなければな



らない。すべてのゆめは終わった。帰り道はどんなにつまらない旅だろう。

スコットの日記には、その時のことがこのように書かれている。五人のがっかりしたようすがむねにせまってくる。

一月十七日、極地に着き、天測によって極心の位置を確かめ、用意のイギリス国旗をひるがえ

したのは十八日の正午近くであった。その喜びよりも五人のむねをうったのは、そこから三キロほどはなれた所にあった小形のテントである。そのいただきにはノールウェーの国旗と、ア



ムンゼンの船の旗が風にひるがえり、テントの中には、ねぶくろ・くつ下・上着などのほかに、五人の隊員の名と、アムンゼンからノールウェー国王にあてた手紙が一通、しかもそれには後から来るスコットにたのむというそえ書きまでしてあった。

スコットの一隊と別れたほかのものは、次ぎ次ぎにひきあげ、二月の終りには全員無事に基地に着いた。

ところが、予定の三月二十日過ぎてもスコットたちはすがたを見せない。と中までさがしに出てみたが、なんの手がかりもなかった。みんなは次第に不安になってきた。四月にはいると二度めの冬が来る。もうそのころには、五人がそう難したことはまちがいないように思われた。

気にかかりながら長い冬をこし、二度目の春のきた八月から準備をして、八人のそうさく隊が基地を出発したのは十月の終りごろであった。

南へ進むこと半月ばかり、十一月二十日の昼ごろ、一トン貯蔵所から二十キロ進むと、西へ一キロほどはなれた雪原の中に、なかば雪のふきだまりにうずまったテントが一つ、そのそばにはスキーのつえが二組と、そりのほ柱の竹ざおが一本、雪の上に頭を出しているのを発見した。

かけよって雪をかきのけた。やがてテントをすっかりほり出してみると、その中に、変わりはてた三人のいたましいすがたがあった。

一行の者は、断腸の思いでしばらくそのすがたに見入った。

隊長スコットをまん中に、左にウイルソン、右にパワーズがしずかに目をつぶったまま横たわっていた。テントの中はきちんとかたずき、スコットがいつも手からはなさなかつた日記帳のはいったふくろも発見された。あきかんで作ったランプ、毛皮のくつをほぐしてとった燈しんもあった。死のまぎわまで、とぼしいアルコールを燃やしたあかりで、貴重な日記をつけていたことがわかった。アムンゼンの手紙や、隊員のひとりから借りて行った一さつの本までちゃんと持ち帰っていた。

さらに雪の下をほると、そりやスキーや、気象日記や、重さ十四キロ以上もある地質学の標本まで出てきた。日記によって、南極に着いたこと、三月二十一日にここまでたどりつき、はげしいあらしに九日間もどじこめられ、ついに最後をとげたこと

がくわしくわかったのである。

スコットら五人の帰り道がどんなにこん難なものであったか。エバンズはどうしようにかかって次第に弱り、そのうえはげしいふぶきが続き、うえと、こごえと、重いそりを引く行進は苦しいかぎりであった。道々貯蔵所をさぐりあてて食べ物と油をおぎない、二月はじめに、やっと氷河のいただきの貯蔵所にとどりついた。氷河のわれ目をよけて下る難行の中でも、ウイルソンの指導で、ふ近の地質や、貴重な鉱物標本をさい集したのであった。

ウイルソンとパワーズもどうしようで足をいためていた。エバンズはますます弱り、ついに氷河のふもとで一生を終った。それからの道はいよいよ苦しく、めったにない悪い天気が続き、

昼はれい下三十四五度、夜は四十度にまで下り、そのうえ、保温のための油が不足した。そのうちにオーツも急に弱ってきた。オーツは、自分のためにめいわくをかけないようと、三月十五日の夜、テントの外に出て永久にすがたを消したのであった。スコットら三人は、最後の勇気をふるって、一トン貯蔵所まであと二十キロの所まで着きながら、連日の暴風とつかれのために一歩も進むことが出来ず、ついに悲そうな最後をとげたことなど、すべてスコットの日記で知ることができた。

エバンズやオーツのいがいは、そうさく隊が必死に努力したが、ついに発見することができなかった。

南極の英ゆうスコットはおしくもその栄かんをアムンゼンに

ゆずった。しかし、このたん検隊の大きくなってからは、その科学的な調査にある。南極の気象や、地質や、水陸の生物から、人のからだにおよぼすえいきょうまで調べあげ、南極のほんとうのすがたを世界に知らせたのであった。

それにもましてい大なのは隊長スコットのけだかい精神である。苦しい中であって多くの隊員をよくまとめ、勇気をふるいおこし、死にのぞむまで自分の責任を果たしたのであった。かた手で、盟友ウイルソンをだくようなしせいで息絶えていたスコットのすがたは、その美しい友情と愛の精神を永久に物語っている。



学習の手引

一 花のように

(一) 花

- (1) この詩を読んで、どういう感想を持ちましたか。それをノートに書いてください。またみんなて話し合ってください。
- (2) この作者は、私たちに何をいおうとしているのでしょうか。自分で読みとったことを発表してください。

(二) 運動場

- (1) 運動場で遊んでいるみんなのようすを、そのままつづいた詩です。どういふ点が、生き生きと書いていると思いますか。

(2) 「さけびがさけびをよび、動きが動きを追う。」というのは、どういう心持をあらわしているのだと思いますか。

(三) ここに手がある

- (1) 手と足はどのような力をもっていると思いますか。この詩を読んで自分の考えたことを言ってください。
- (2) この詩を読んで、もっとも強く感じた点について、話し合ってください。

二 新聞の話

(一) 輪転機のうなり

- (1) 文を読んで次ぎの問題に答えましょう。
○新聞社のはとはどんな働きをしますか。
○はとは、どれくらい重さのものを運ぶことができますか。

○世論調査はなんのためにするのですか。

また、どんな方法で調査しますか。

○整理部はどんなことをする所ですか。

○電送写真は、どんなしくみで先方に送ることができるのでしょう。

○新聞の印刷される順序をお話してごらんください。

○輪転機が動いている時はどんなようすですか。

○新聞はどんな順序で発送部から各駅に送りどけられますか。

○新聞社見学の文を読んで、あなたはどんなことを感じましたか。

(二) 新聞の歴史

(1) この文を読んで、新聞の発生した理由を短かくまとめてごらんください。

(2) 印刷機を発明した人は、どこの国の何と

○本能 ○言論機関 ○通信

○記録 ○海外事情 ○報道

○耳よりな話 ○ありのまま

○提供する ○経験する

(11) 新聞の歴史を読んでどんなことを感じましたか、ノートに感想を書きましよう。

三 愛の力

(一) やまどりのおかあさん

(1) この文を読んで次ぎの問題に答えなさい。

○作者が高原を歩いていたのは、いつごろのことですか。

○高原は、どんなようすでしたか。

○作者は、どんな気持ちで高原を歩いていましたか。

○どうして、もとの所へひき返したのですか。

いう入ですか。

(3) 現代のような新聞はいつごろできたのでしょうか。

(4) 日本の新聞のおこりは、いつごろで、何という新聞でしたか。

(5) 読売かわら版について知っていることを説明しなさい。

(6) 文久新聞にはどんな種類がありましたか。また、なぜ文久新聞といたのでしょう。

(7) 日本ではじめてできた日刊新聞は、何という新聞で、いつから発行されましたか。

(8) 明治十四年ごろの新聞内容は、どんなけい向でしたか。

(9) 新聞は、私たちの生活にどんな関係がありますか。

(10) 次ぎの語を使って短い文を作りましよう。

○やまどりは、どんな所に、どんなふうにしていましたか。

○写生している間、やまどりはどんなふうにしていましたか。

○写生をなぜ半分をやめたのでしょう。

(2) 何が作者の心を強く打ったのですか。

(3) あなたは、この文を読んでどんなことを一番強く感じましたか。感想をノートにまとめてごらんください。

(二) めぐりあい

(1) この文を読んで次ぎの問題に答えなさい。

○車だいくの夫婦はジャンをどんなにかわいがっていましたか。

○ジャンがいなくなったのは、いくつ時ですか。どうしていなくなってしまったのでしょうか。

○ジャンがいなくなった時、車だいくの夫婦はどうしましたか。

○車だいくの夫婦は、どうして住みなれた家を売りはらって旅に出たのですか。

○旅に出た夫婦は、どんな苦勞をしましたか。

○夫婦はどうしてパリに向かったのですか。○どうして、夫婦は聖水のほう仕をするようになったのでしょうか。

○わかい男がジャンだとわかるまで、夫婦は、どんなことを話し合い、どうしましたか。

(2) わかい男は、どうして車だいくの夫婦が自分の両親だとわかったのでしょうか。

(3) 「めぐりあい」の文を読んで、あなたが最も強く感じたことはどんなことですか。

(二) ものいうおもちゃ

(1) 電話の発明で有名な、アレキサンダー・グラハム・ベルの伝記ですね。よく読んで成功するまでの苦心をよく調べてみましょう。

(2) その発明の苦心を、年令と研究のすすみかたとから考えて、いくつかに区切って順順に調べてみましょう。

○ベルは、いつどこで生まれましたか。

○小さいころのベルはどうでしたか。

○十五才のころ、どんなことに気づきましたか。

○ボストン市のろうあ学校にいた時、どんな考えがうかびましたか。

○その後の苦心について、要点を書き出して、くわしく調べましょう。

○成功の日の喜びについて、あなたはどうか。

四 工夫と発明

(二) 電燈の消えたとき

(1) この文を読んで、仁一君はどんな子供だと思われましたか。

(2) 仁一君のうちだけが停電したげんいんはどこにありましたか。

(3) 安全器のヒューズをつけかえた仁一君は、おかあさんにどんなことをききましたか。またなぜこんなことをきいたのでしょうか。

(4) ねえさんの電気スタンドのつかないげんいんは、どこにありましたか。それを発見するまでに、仁一君はどんなことを考え、どんなことをしましたか。

(5) みなさんも、仁一君のように、電気について、いろいろなことを研究して、それを発表してください。

思いましたか。

(3) すぐれた発明家の伝記を読んで、そのくふうと苦心について、よく考えましょう。

(4) 伝記を読んで、感じたことや、考えたこと、どの感想文を書いて、発表しましょう。

五 世界の旅

ずいぶん長い文ですね。国々の特ちょうによく注意しながら、まず、ひと通り読み通しましょう。意味のわからないことばや、特別の名まえが出たら、いちいちノートに書きとりましょう。

・学習の参考として、世界地図・世界地理ふろく大けいなどをじょうずに使いましょう。

全文の見通しがついたら、その一つ一つをくわしく調べましょう。

(一) アメリカの町々

(1) サンフランシスコ、シカゴ、ニューヨークについて、それぞれの町の特ちょうを書きだしましょう。

(2) アメリカの町々について、どんな感じをもちましたか。

(二) イギリスの工学

(1) グリニッチ天文台・ケンシントンの工科大学の要点をノートにまとめましょう。

(2) イギリス人、および、イギリスの工学についてどう思いましたか。

(三) フランスの美術

(1) パリの町の特ちょうを調べましょう。

(2) エッフェルどうの飛行家の話を、どう思いましたか。

(3) フランスは、どんな国だと思いましたか。

(四) スイスの風景

(一) 原始林の明星

(1) この文は、一、二、三の三つからできています。全体を通してよく読めるように練習してから、一つ一つをくわしくしらべてみましょう。

○一の文は、シュバイツァーたちのどうしたことが書いてありますか。

○二の文では、土人たちが、シュバイツァーをどうしたことが書いてありますか。

○三の文では、シュバイツァーがどうしたことが書いてありますか。

(2) シュバイツァーとロコについて、次ぎのことをしらべなさい。

○シュバイツァーは、どんな心持の人だと思えますか。その心持のよくあらわれた所を書きぬいてみましょう。

(1) ジェネーブ・ベルン・アルプス山脈について調べましょう。

(2) スイスについては、どういうことを強く感じましたか。

(五) イタリアの古都

(1) 古都ローマについて、どう思いましたか。

(2) ナポリ・ボンペイの特ちょうは何ですか。

(3) イタリアでは特に何を感しましたか。

(六) インドの子供

(1) インドの子供で感心したのは何ですか。

(2) インドについてどう思いましたか。

ひと通り調べ終えたら、もう一度全文を見通して、国々の特ちょうをはっきりとさせましょう。またそれを、紙しばい、げん燈に作って、おたがいに発表しましょう。

六 新しい足あと

○ロコについては、どう思いますか。そのよくあらわれたところを書き出してみましょう。

(3) この文を読んで、次ぎのことから感じて感想をまとめましょう。

○この文に、「原始林の明星」という題をつけたわけを考えてみましょう。

○この文を読んだ感想を文にまとめて、発表し合しましょう。

(4) 次ぎの語句をかいしゃくしなさい。

○不思議なけいはいに耳をすました。

○高くきわまりない夜空をおおぎみた。

○このあれ果てた土地にもようやく新たな芽ばえが育ってきたと感謝するのであった

(5) 次ぎの漢字に読みがなをつけなさい。

助手 熱病 貸す 燃える 注しや

事件	紙型	祝電	祝福	シカゴ市	サンフランシスコ	酸素	ざら紙	最新式	最後	最高記録	サーカス	混血児	コロセウム	ご楽新聞	小屋がけ
14	18	120	111	74	72	29	14	81	141	12	36	107	91	28	126
ジュネーブ市	需要	週刊	十五世紀	集団生活	受電そう置	衆議院議員選挙	写真通信管	社会生活	事務	指導	出勤して	時事的な	辞して	支持	子午線
86	28	25	24	22	16	13	12	25	10	142	43	26	29	13	79
スタンド	頭上	スコットランド	スクリーン	入種	新憲法	心線	信者	受話機	白ナガスクジラ	支流	助手	常設美術館	上陸地点	上陸第一歩	しゅう長
56	134	62	80	95	29	55	42	15	123	105	114	86	124	77	107
専門の	前と	全速力	全国紙	世論調査	絶命	絶景	節約	接しよく	責任	聖水	政とう	政治運動	正確	声えん	スパーク
65	117	137	29	12	84	94	133	56	118	42	28	28	6	118	58

機体	気象	機関紙時代	機会	記おく	かんそう機	観測	感動して	感光	官板	変わりはて	かなめ	かどわかした	活字	合戦	火山ばい
83	128	28	22	46	16	128	48	16	25	140	15	50	17	26	94
計算じやく	系統	形式	ケース	けい向	経営	ぐうぜん	さわまりない	議論	旧せき	極心	極地	競争者	教会	貴重な	基地
13	75	25	18	28	73	42	103	28	93	137	117	118	42	141	119
こう下	工学	高か鉄道	工科	校えつ部	考案	言論機関	げん燈	原始林	原動力	原因	現在	現象	ゲラ刷	けたたましい	計算器
83	76	75	80	17	80	25	31	97	24	60	29	16	17	124	13
湖辺	古都	こつきまわして	国会	古代	ごじ悲	誤字	小組	古今の	国運	鉱物標本	コード	交しょう	こう外	高原	工芸
86	90	106	28	91	42	15	17	86	28	142	56	28	87	30	91

南極たん検	177	はためいて	136	ふ号	64
南極大陸	118	バックンカム宮てん	77	婦人	46
難行	142	発送部	20	不戦国	90
難所	133	発生	22	不足した	143
日刊新聞	27	発達史	25	部落生活	23
日しゃ病	95	発行中止	27	フランスパン	32
にぶい	15	発着	74	ふれまわる	23
入港	117	早わざ	34	文化国家	29
ニュージーランド	118	バレーボール	6	分散	50
ニューヨーク市	74	ハワイ	79	平均して	12
ねぶくろ	139	万事	78	へいぜい(から)	43
念じながら	42	ハンドル	13	ベッド	77
野末	37	ひざまずく	101	ヘルメットぼう	95
場合	23	悲そうな	143	ペンギン鳥	122
配布	27	ひそめ(て)	98	報道中心	28
ばく音	83	必死	120	ほうし	43

そう快	87	大道	26	統計	13
そう身具	85	大理石造り	93	投書	13
総称して	27	タクシー	77	どうしょう	142
そうさく隊	140	立ちこめ(て)	37	燈しん	141
倉庫	128	単調	45	銅貨	96
そう大な	93	断腸	140	道化師	36
そう難	139	地下鉄	75	特色	29
ソケットプラグ	56	地点	130	特ちょう	107
底知れない	133	地方紙	29	と殺場	74
組織化	25	調合法	116	とっ進	117
そしり	67	貯蔵	125	ドライブ	87
隊員たち	124	角ぶえ	100	内容	28
隊長	117	連ねて	72	中つき	125
大けつ作	85	提供	21	なごり	110
大西洋	76	てだて	51	ナポリ	94
タイプライター	13	手ちがい	129	とう技場	91
				とうギボウシ	30
				電流	16
				電送写真室	16
				電信機械	64
				伝書バト	11
				電気機関車	81
				電気パン焼器	52
				電気ベルト	15
				天日	95
				天測	138
				天文台	79
				天災	26
				テレタイプ	15
				デッサン	86
				てつ夜	13

保温	防寒具	方形	ぼう高とび	暴風	北極	牧場	保しょう	ボストン市	保存	ほつつき歩いて	ほどこしもの	本国	本隊	本能	まどらかな
143	132	14	9	120	118	4	29	61	91	42	42	62	130	23	103
未開時代	ミケランゼロ	道すがら	南半球	耳よりな	明星	民間の	無数	むらがる	盟友	めぐりあい	メルボルン	もうれつな	モールスふ号	木版	もとづく
22	91	39	120	23	97	25	74	121	137	35	117	19	15	26	24
訳して	夜行列車	ヤシ	ゆうかなな	友情	ゆう大な	ゆうゆう	有力な	雪海ツバメ	ゆずられました	輸送	輸入し	洋学者	洋書調所	よう岩	要求
27	74	97	83	144	84	6	29	120	50	21	27	27	27	94	28
ようしやなく	ヨーロッパ	横たわつて	余地	予定	読売かわら版	流水	輪転機	連日	レントゲン	老貴婦人	ローマ法王	ロスアンゼルス	わきかえつて	ワシントン	
123	114	141	137	105	26	121	10	143	80	50	93	73	7	66	

新しく出た漢字

輪	統	提	災	酸
(10)	(13)	(21)	(26)	(29)
均	支	未	版	辞
(12)	(13)	(22)	(26)	(29)
査	誤	敵	称	冷
(12)	(15)	(23)	(27)	(30)
算	検	否	浜	幹
(12)	(15)	(23)	(27)	(30)
録	刷	性	著	臨
(12)	(15)	(23)	(28)	(34)
衆	型	盛	需	末
(13)	(18)	(24)	(28)	(37)
議	包	刊	求	借
(13)	(20)	(25)	(28)	(43)
拳	輸	言	傾	勤
(13)	(21)	(25)	(28)	(43)

測 <small>そく</small>	蔵 <small>ぞう</small>	祖 <small>そ</small>	墓 <small>はか</small>	氏 <small>し</small>	至 <small>いたる</small>	貴 <small>き</small>
(138)	(125)	(110)	(92)	(76)	(64)	(50)
腸 <small>ちよう</small>	減 <small>へ</small> つて	舎 <small>しゃ</small>	景 <small>けい</small>	技 <small>ぎ</small>	周 <small>しゆう</small>	財 <small>ざい</small>
(140)	(127)	(113)	(94)	(83)	(67)	(50)
鉞 <small>ごう</small>	庫 <small>こ</small>	鼻 <small>はな</small>	銅 <small>どう</small>	附 <small>つ</small>	困 <small>い</small>	仁 <small>じん</small>
(142)	(128)	(114)	(96)	(83)	(67)	(52)
永 <small>えい</small>	標 <small>ひょう</small>	責 <small>せき</small>	貸 <small>か</small> して	刃 <small>へん</small>	余 <small>よ</small>	丁 <small>ちよう</small>
(143)	(128)	(118)	(99)	(86)	(69)	(53)
	規 <small>き</small>	基 <small>き</small>	照 <small>て</small> らし	潔 <small>けつ</small>	丸 <small>まる</small>	絹 <small>きぬ</small>
	(128)	(119)	(100)	(87)	(72)	(55)
	張 <small>は</small> つて	暴 <small>ぼう</small>	混 <small>こん</small>	衛 <small>えい</small>	宮 <small>みや</small>	接 <small>せつ</small>
	(135)	(120)	(107)	(87)	(73)	(56)
	跡 <small>あと</small>	築 <small>ちく</small>	見 <small>み</small>	薬 <small>やく</small>	系 <small>けい</small>	故 <small>こ</small>
	(136)	(125)	(107)	(88)	(75)	(57)
	盟 <small>めい</small>	貯 <small>ちよ</small>	兵 <small>へい</small>	居 <small>きよ</small>	預 <small>あず</small> けて	因 <small>いん</small>
	(137)	(125)	(110)	(91)	(76)	(60)

編修委員

日本女子大学付属 豊明小学校主事	日本女子大学付属 東京芸芸大学竹早 小学校教諭	同	成蹊中学校教諭	日本女子大学付属 豊明小学校教諭	作家
西原慶一	泉節二	山下正雄	飛田多喜雄	小山立夫	齋田喬

Approved by Ministry of Education (Date Sep. 28, 1950)

国語の本十一 (小学校第六学年前期用)

昭和二十六年五月十日印刷
昭和二十六年五月十五日発行
(昭和二十五年八月十二日文部省検定済)

定価 六十二円五十銭

12 二葉	小国 627
----------	--------

著作者 代表者 西原慶一

発行者 東京都北区稻付町二丁目二〇八番地
二葉株式会社
代表者 大野治輔

印刷者 東京都北区稻付町二丁目二〇八番地
二葉株式会社
代表者 大野治輔

発行所 東京都北区稻付町二丁目二〇八番地
二葉株式会社

さし絵・表紙

小谷野半二 佐藤八郎 高橋庸男



なまえ

広島大学図書

0130449914



二葉株式会社

庫
50
14